

岩 橋 高 柳 遺 跡

－井ノ口秋月線道路改良工事に伴う発掘調査報告書－

2004年6月

財団法人 和歌山県文化財センター

序 文

和歌山県の北西に位置する和歌山市は、紀伊国の政治・経済の中心として古くから発展し、肥沃な平野部や周辺の丘陵上には多数の集落や古墳などが形成されてきました。

岩橋高柳遺跡は、国の特別史跡である岩橋千塚古墳群にほど近い平野部にある集落遺跡です。今まで存在が知られていなかった遺跡ですが、岩橋城跡の伝承地にあたります。道路建設に関連する工事中に遺物が確認されたことから試掘を行い、発掘調査を実施するにいたりました。

調査の結果、弥生時代から江戸時代にかけての、当時の生活痕跡が確認されました。飛鳥時代の土坑や鎌倉時代の屋敷地跡のほか、伝・岩橋城のものではないかとも考えられる室町時代の堀状遺構など多数の遺構がみつかりました。また、飛鳥時代・鎌倉時代の良好な一括出土遺物や、江戸時代後期の陶磁器類が多量に出土しています。

ここに、発掘調査の成果をとりまとめ、報告書を刊行いたします。本書が和歌山市のみならず、歴史資料として一般に広く活用されることを願ってやみません。

最後に、調査にあたりご指導・ご協力いただきました関係各位ならびに地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成16年 6 月

財団法人 和歌山県文化財センター

理 事 長 木 村 良 樹

例 言

- ・本書は、和歌山市岩橋に所在する岩橋高柳遺跡の発掘調査報告書である。
- ・調査は県道井ノ口秋月線道路改良工事に伴うもので、発掘調査を平成15～16年度に行なった。また、発掘調査とほぼ併行して出土遺物整理事業を実施した。
- ・発掘調査及び出土遺物整理業務は、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
- ・事務及び調査組織は下記のとおりである。

事務 専務理事（事務局長兼務）岩橋驍

事務局次長 松田正昭

管理課長 西本悦子

副主査 松尾克人

調査 埋蔵文化財課長 渋谷高秀（1～3区発掘調査担当）

技師 丹野拓（4・5区発掘調査、出土遺物整理担当）

- ・発掘調査・出土遺物整理に際し、和歌山県海草振興局道路課、和歌山県教育庁文化遺産課、高柳地区自治会をはじめ、北野隆亮・井馬好英（和歌山市文化体育振興事業団）、中村貞史（紀伊風土記の丘）の助言・協力を得た。記して感謝の意を表す。
- ・本文は丹野が執筆した。但し、1～3区の遺構・土層等については渋谷の実績報告をもとに執筆した。
- ・遺構の写真は1～3区を渋谷が、4・5区を丹野が撮影した。遺物写真は丹野が撮影した。
- ・調査区の平面図と遺構図は1～3区を渋谷が、4・5区を丹野が作成した。遺物図は丹野が作成を担当した。
- ・本書は丹野が編集した。
- ・調査及び整理作業で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

凡 例

- ・発掘調査コードは03-01-427である。
- ・調査期間は2003年10月21日から2004年04月23日までである。
- ・調査の基準線は国土座標第VI系を、標高は東京湾標準潮位（T.P.値）を用いた。
- ・土層の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』を使用した。

目 次

序文

例言・凡例

目次

挿図目次・写真図版目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 位置と環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	2
第3節 調査の方法	4
第2章 調査成果	6
第1節 層序	6
第2節 遺構	12
(1) 弥生時代の遺構	12
(2) 飛鳥時代の遺構	12
(3) 奈良・平安時代頃の遺構	15
(4) 鎌倉時代の遺構	15
(5) 室町時代の遺構	19
(6) 江戸時代の遺構	20
第3節 遺物	22
(1) 弥生時代の遺物	22
(2) 古墳時代の遺物	22
(3) 飛鳥時代の出土遺物	23
(4) 奈良・平安時代の遺物	25
(5) 鎌倉時代の遺物	26
(6) 室町時代の遺物	28
(7) 江戸時代の遺物	29
第3章 遺跡の変遷	32
第4章 総括	36

写真図版

抄録

挿 図 目 次

図 1	遺跡の周辺	3
図 2	調査区の設定状況	4
図 3	基本層序柱状図	6
図 4	1・2区平面図	7・8
図 5	3～5区平面図	9・10
図 6	4区壁面土層図	11
図 7	弥生時代の遺構	12
図 8	飛鳥時代の遺構①	13
図 9	飛鳥時代の遺構②	14
図10	鎌倉時代の遺構①	17
図11	鎌倉時代の遺構②	18
図12	室町時代の遺構	19
図13	江戸時代の遺構	21
図14	弥生時代の遺物	22
図15	古墳時代の遺物	22
図16	飛鳥時代の遺物①	24
図17	飛鳥時代の遺物②	25
図18	奈良・平安時代の遺物	25
図19	鎌倉時代の遺物	27
図20	室町時代の遺物	28
図21	江戸時代の遺物①	30
図22	江戸時代の遺物②	31
図23	遺構の変遷	33・34
図24	堀状遺構の復原ライン	35

写真図版目次

PL 1	遺跡遠景
PL 2	1-1区
PL 3	1-2区
PL 4	2-1区
PL 5	2-2区
PL 6	3-1区、3-2区
PL 7	3-3区
PL 8	4-1区①
PL 9	4-1区②
PL10	4-2区①
PL11	4-2区②
PL12	4-2区③
PL13	5区、土層
PL14	弥生・古墳・飛鳥時代の遺物
PL15	飛鳥時代の遺物②
PL16	飛鳥時代の遺物③
PL17	飛鳥・奈良・平安時代の遺物
PL18	鎌倉時代の遺物
PL19	室町・江戸時代の遺物
PL20	江戸時代の遺物②

表 目 次

表 1	調査・整理の工程	1
表 2	各区の調査状況データ	5

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

和歌山市東部近郊を東西に横断する県道井ノ口秋月線は紀ノ川南岸の幹線道路であるが、道幅が狭く屈折しているため、朝夕には渋滞が起り改善が期待される状況にあった。井ノ口秋月線を幅約25mの直線道路とするため工事が開始されたが、その時点では当遺跡の存在は知られていなかった。2003年5月、今回の調査地付近の側溝等工事中に中世の土坑と青磁・天目茶碗の出土が確認されたため、付近で伝承のある岩橋城跡^{註1}の可能性等を含め検討が必要となった。同6月、遺跡の範囲を確認し保護上必要な措置をとるため、県教育委員会による試掘調査が実施された。

試掘調査では本調査の1～3区に相当する地点に4ヵ所トレンチを設定し試掘を行い、飛鳥時代と江戸時代の遺構・遺物と、古墳時代後期から近世までとみられる遺物を確認した。試掘の結果、一辺250mほどの不整形の範囲が遺跡として新規登録された。^{註2}

試掘の結果を受けて、新規遺跡のうち井ノ口秋月線が通過する範囲については、本調査を実施することとなった。調査地は現在の高柳の集落の中にあたり、西から順に1～5区を設定している。1～3区の計約1,790㎡は平成15年11月4日から平成16年1月31日に先行して調査を行った。4・5区の計約770㎡は民間の住居移転に伴う中断期間を挟んだ後に、平成16年3月1日から4月14日にかけて現地調査を実施した。^{註3}

調査終了後には、出土遺物・写真・図面等を整理し、当報告書を刊行するための作業を行った。5月末までに出土遺物の洗浄・接合・注記・補強・復原・遺物台帳作成といった基礎作業を行うとともに、実測・トレース・組版・写真撮影等の報告書作成にかかる作業についてもほぼ同時平行で実施した。

表1 調査・整理の工程

	2003年			2004年					
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
調査準備									
1区調査									
2区調査									
3区調査									
4区調査									
5区調査									
遺物整理									
報告書作成									

第2節 位置と環境

(1) 地理的環境

岩橋高柳遺跡は紀伊北部、紀ノ川下流南岸の沖積平野に位置する。岩橋高柳遺跡は紀ノ川氾濫原の南岸微高地上に位置しており、東は高積山、南は岩橋山塊、西は花山丘陵、北は紀ノ川に囲まれており、東西2.5km、南北2.0kmほどの小平野状を呈している。古墳時代に造られたと想定される宮井用水が遺跡の南方を流れ、標高は7～8mで現状では起伏はほとんどない。

遺跡は、現在のJR和歌山駅から東へ4km、岩橋山塊北麓と紀ノ川南岸からそれぞれ約1kmの場所にあたる。現在、法照寺を中心に小規模な集落が形成されている。

(2) 歴史的環境

紀ノ川南岸地域では、丘陵地を中心にナイフ形石器などの旧石器が採取されている。

縄文時代の遺跡としては、瀬宜貝塚・鳴神貝塚等の貝塚が知られる。瀬宜貝塚は調査地の南東2kmにある貝塚で、縄文時代前期を中心に後期までの土器が出土している。鳴神貝塚は近畿地方で初めて確認された貝塚で、縄文時代後期から晩期にかけての土器や人骨の出土で有名である。縄文時代には両貝塚に近いラインまで海岸線が迫っていたものと考えられる。

弥生時代の遺跡としては、前期に形成された環濠集落として有名な太田・黒田遺跡などが知られる。南流する当時の紀ノ川左岸河口部には、太田・黒田遺跡の他に、井辺遺跡・神前遺跡・和田遺跡が連なる。

古墳時代の遺跡としては、秋月遺跡・鳴神遺跡群等が知られる。紀直系の集団の集落とみられ、出土遺物からは朝鮮半島との繋がりも指摘される。平地にある両遺跡では、秋月1号墳を始めとする古墳等が築かれ、5世紀になると花山古墳群へ、次いで岩橋千塚古墳群へと墓域が移動・拡大しているものとみられる。これらの遺跡は、古代・中世・近世と集落・墓地・耕作地などの変遷を経ながら、現在まで続いている。

岩橋高柳遺跡の所在する和佐から岩橋にかけての小平野には、縄文時代前期を中心として後期までの土器が出土した瀬宜貝塚のほかいくつかの土器散布地があるが、その実態はほとんど分かっていない。岩橋山塊には天王塚山遺跡があり、弥生時代の中期後葉から後期頃の高地性集落と指定される。平野部では岩橋高柳遺跡の調査まで、遺跡はまったく知られていない。

岩橋高柳遺跡の周辺では、古墳時代の遺跡についても判然としない。工事等で遺構・遺物が確認されたという話が多数伝わっているが、調査や遺跡の範囲確認等は行なわれずに今に至っている。おそらく、岩橋Ⅱ遺跡や栗栖Ⅰ遺跡などを中心に、その他の遺跡が点在する状況であろうと推定される。

文献で知られる屯倉の位置についても不明であり、周辺には未知の遺跡が多数埋蔵されているものと考えられる。中世の遺跡としては、井ノ口遺跡、城ヶ峯城跡などが知られている。



- | | | | |
|-----------|---------------|------------|-------------|
| ① 岩橋高柳遺跡 | 176 祢宜貝塚 | 307 神前遺跡 | 321 岩橋遺跡 |
| 93 田屋遺跡 | 177 河南中学校北方遺跡 | 308 井辺遺跡 | 322 栗栖Ⅰ遺跡 |
| 96 府中遺跡 | 178 和佐中遺跡 | 311 大日山Ⅰ遺跡 | 324 高橋神社遺跡 |
| 124 北田井遺跡 | 183 和佐古墳群 | 314 鳴神Ⅱ遺跡 | 327 太田・黒田遺跡 |
| 142 山口遺跡 | 184 花山古墳群 | 316 鳴神Ⅳ遺跡 | 331 秋月遺跡 |
| 145 川辺遺跡 | 185 岩橋千塚古墳群 | 317 鳴神貝塚 | 356 太田城跡 |
| 149 宇田森遺跡 | 186 井辺前山古墳群 | 318 鳴神Ⅴ遺跡 | 381 岩橋Ⅱ遺跡 |
| 150 上野廃寺跡 | 300 吉礼貝塚 | 319 音浦遺跡 | 388 西田井遺跡 |

0 2 km

図1 遺跡の周辺

第3節 調査の方法

発掘調査業務は、当センターの調査員が現場での指揮にあたり、掘削等の土木工事は工事請負方式により業者へ発注し、記録の作成については補助員を直接雇用して業務を実施した。調査は県教育庁の試掘データをもとに実施したが、実際の遺構面数や工事との兼ね合い等の状況を加味し、協議の上、臨機応変に調査にあたっている。

調査区の設定（図2）

調査区は西から順に1～5区としている。5区を除く各調査区は、それぞれの調査区をさらに分けて、調査区と土置き場を反転させて発掘調査を行っている。調査時の各調査区の区割りは1区の南半が1-1区、北半が1-2区、2区の南半が2-1区、北半が2-2区、3区の北東が3-1区、南東が3-2区、西半が3-3区、3-1区から約25m東に離れた位置が3-4区、4区の北半が4-1区、南半が4-2区である。基本的に調査順序に枝番号を振っているが、3-3区は調査時には2-2東区と仮称していたものを改名している。

各調査区の調査概要

当調査では担当者・地区によって調査方法が異なっているうえ、担当者同士の意見・認識の一致しない点が多数存在した。遺跡の正しい理解を阻害するおそれがあるため、各調査区ごとの調査方法の違いを前提条件として提示しておく（表2）。

1-1区は遺構面を2面検出し、調査を実施している。上層は江戸時代の遺構面であり、下層では鎌倉時代の遺構が確認されている。遺構は完掘した。1-2～3-3区は地山まで機械で掘り下げ、

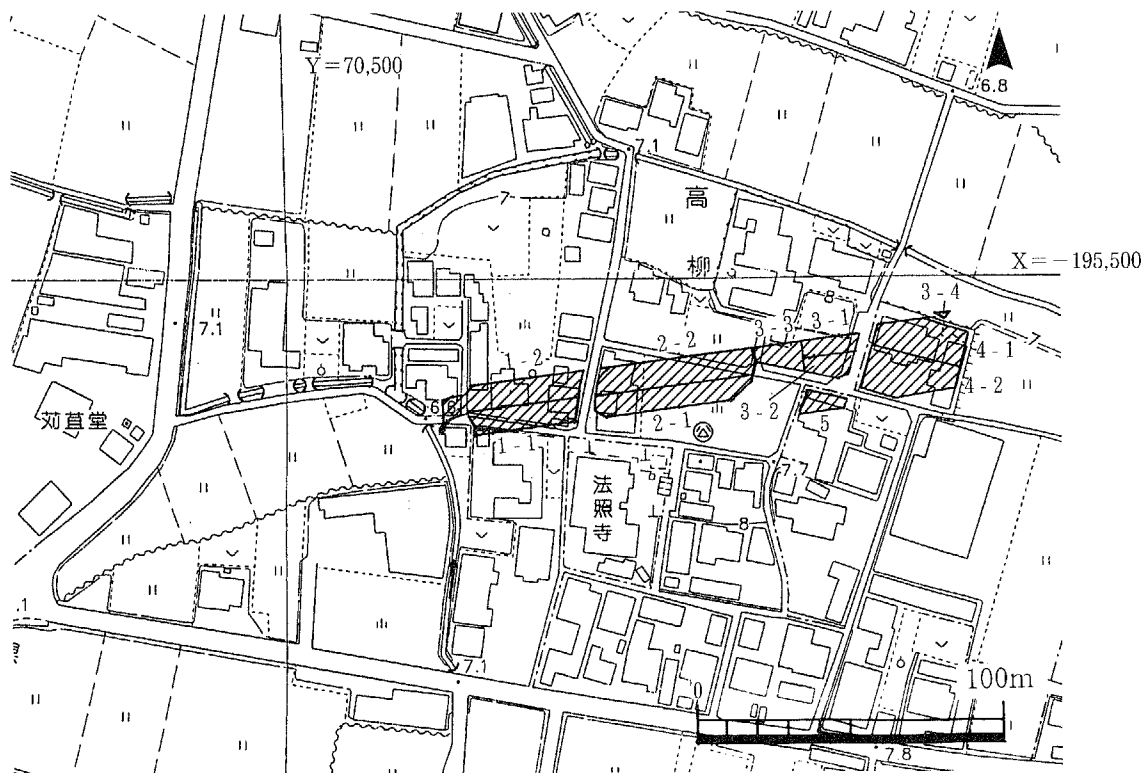


図2 調査区の設定状況

飛鳥・室町・江戸時代の遺構を検出した。飛鳥・室町時代の遺構は半裁等により上層を確認した上で完掘した。但し、室町時代の堀状遺構については、調査時には近世の遺構として取り扱っている。江戸時代の遺構は半裁・断面図化作業を省略したほか、掘削上量の低減等のため、サンプル掘削・未掘削としたものも多数存在する。4・5区は鎌倉・室町時代の遺構面の直上までを機械掘削し、江戸・室町・鎌倉・奈良～平安・飛鳥・弥生時代の遺構を確認した。基本的に分層発掘による遺構面の年代把握を行っており、出土遺物のない遺構についても年代を比定している。遺構はすべて半裁して土層を確認した上で、完掘した。

なお、1-1区下層遺構（遺構旧・49～73）は2-1区と遺構番号が重複しており混乱をきたすため、遺構名を700番代へ移行し「SE72」→「SE772」のように改称した。

表2 各区の調査状況データ

	1-1区	1-2区	2-1区	2-2区	3-1区	3-2区	3-3区	3-4区	4-1区	4-2区	5区	計
期間	前半調査(平成15年11月～16年1月)								後半調査(平成16年3～4月)			—
面積(m ²)	622.1		835.1			335.5			705.4		63.1	2561.2
	273.6	348.5	369.0	466.1	100.7	107.7	119.4	7.7	341.4	364.0	63.1	—
東西距離(m)	36.5	45.7	52.1	53.1	17.4	16.7	13.5	5.4	31.0	32.2	16.0	149.0
南北距離(m)	11.4	14.6	13.7	11.4	7.3	9.2	8.5	3.6	16.6	17.1	6.9	33.6
地山東西傾斜(°)	0.7西下	0.7西下	?	?	0.1西下	?	0.2西下	?	0.2東下	0.0	0.8西下	—
地山南北傾斜(°)	?	?	?	?	?	?	?	?	2.0北下	2.4南下	2.0南下	—
遺物包含層数	0?	0	0	0	0	0	0	?	3	4	3	0～4
調査面数	2	1	1	1	1	1	1	0	2	4	3	0～4
標高(m)・地山	(6.33)	6.36(南壁)	7.15	6.97(西端)	7.70(北壁)	(7.57)	7.45	?	7.65	7.61	7.49	6.3～7.7
・弥生	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.61	—	7.6
・飛鳥	—	—	7.15	—	7.70(北壁)	(7.57)	7.45	—	—	7.68	—	7.1～7.7
・飛鳥以降鎌倉以前	—	—	—	—	—	—	—	—	7.65	7.69	7.49	7.4～7.7
・鎌倉	(6.44)	—	—	—	—	—	—	—	7.65	7.69	7.49	6.4～7.7
・室町	(6.33)	—	—	—	7.70(北壁)	—	7.50	—	7.78	7.81	7.65	6.3～7.7
・江戸	6.36(北壁)	6.36(南壁)	6.97(西端)	6.97(西端)	7.70(北壁)	(7.57)	(7.50)	—	7.94	8.00	7.88	6.3～7.7
機械掘削面標高	6.45	6.35	7.15	7.03	7.61	7.57	7.09	?	7.8	7.8	7.7	—
遺構数(基)	196		215			33			152		19	621
・弥生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
・飛鳥	0	0	2	0	1	1	2	0	0	3	0	9
・飛鳥以降鎌倉以前	0	0	0	0	0	0	(2)	0	7	11	5	25
・鎌倉	32	0	0	0	0	0	0	0	18	50	1	101
・室町	1	0	0	0	1	1	1	0	1	1	1	4
・江戸	163		213			25			67		12	480
遺構密度(基/100m ²)	31.5		25.7			10.0			22.7		30.1	24.2
・弥生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5	0	0.1
・飛鳥	0	0	0.5	0	0.9	0.9	1.7	0	0	0.8	0	0.4
・飛鳥以降鎌倉以前	0	0	0	0	0	0	(0.6)	0	2.1	3.0	7.9	1.0
・鎌倉	(11.7)	0	0	0	0	0	0	0	5.3	13.7	1.6	3.9
・室町	0.3	0	0	0	1.0	0.9	0.8	0	0.3	0.3	1.6	0.2
・江戸	26.2		25.5			7.5			9.5		19.0	18.7
遺物点数(点)	629	277	920	910	116	342	400	0	443	1,737	114	5,890
・弥生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	20
・古墳	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2
・飛鳥	0	0	384	0	58	82	81	0	33	203	0	841
・奈良～平安	0	0	0	0	0	0	0	0	18	36	0	54
・鎌倉	42	0	1	0	0	11	2	0	129	1,096	77	1,358
・室町	12	0	0	0	44	10	85	0	0	6	22	179
・江戸	575	277	535	910	14	239	232	0	263	376	15	3,436

* 数値は四捨五入した。()内数値は推定値。遺構面の標高は調査区壁面の土層図から平均値を割り出したが、1～3区の地山・遺構面標高は調査区内の一部の数値を仮に充当した。江戸時代末期・明治時代の遺構面が一部で遺存していたが、データからは除外した。遺物点数は概括的に接合した後の点数を記載。

第2章 調査成果

調査では、弥生時代から江戸時代までの遺構を620基確認した。このうち77％は江戸時代の遺構であり、調査区全面に展開している。その他の年代の遺構は主に、4区を中心に確認した。

第1節 層序

地山面の標高は3区から4区にかけて最も高く7.6～7.7mほどであり、四方に向かって緩やかに降る微高地を呈している。特に2区の中央から西側へ降る傾斜がきつく、近世包含層が堆積しており、おそらく旧来の地形を踏襲しているものと思われる。土層は調査の前半（1～3区）と後半（4・5区）で理解が異なっているが、共通土層を設定すると下図の通りとなる。

まず、先行した1～3区の土層について説明する。1区では西に降る地山面の上に近世の包含層が複数堆積する。2区の中央付近でこの堆積がなくなり、2区の東半から3区にかけて、地山の上に直接近現代の耕作土と盛土が堆積する状況となる、という。

一方、4・5区の土層では、近現代の土層と地山の間に4層に大別できる遺物包含層を確認した。1層は明治時代以降の遺物を含む近現代の包含層である。2層はオリーブ褐色シルトで近世の遺物を含んでおり、2-Aから2-K層まで11層に細分可能である。3層は褐色シルトで、中世及び近世の遺物を含む包含層である。4層は鎌倉時代の遺物を多く含む包含層である。また、飛鳥時代と弥生時代の遺構は、それぞれ地山と同色でやや砂質の土を0～7cm除去して検出しており、厳密にはそれぞれ対応する層があるものと考えられるが、壁面をいくら精査しても分層できなかったため、調査区の壁面の図上では第5層としてまとめて設定している。

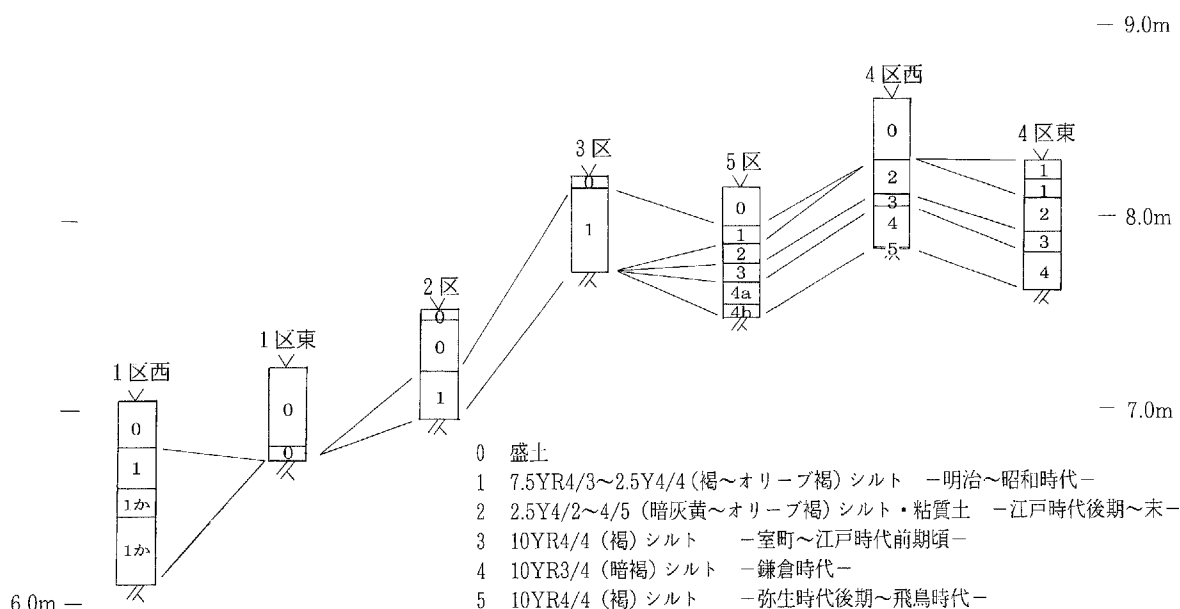


図3 基本層序柱状図

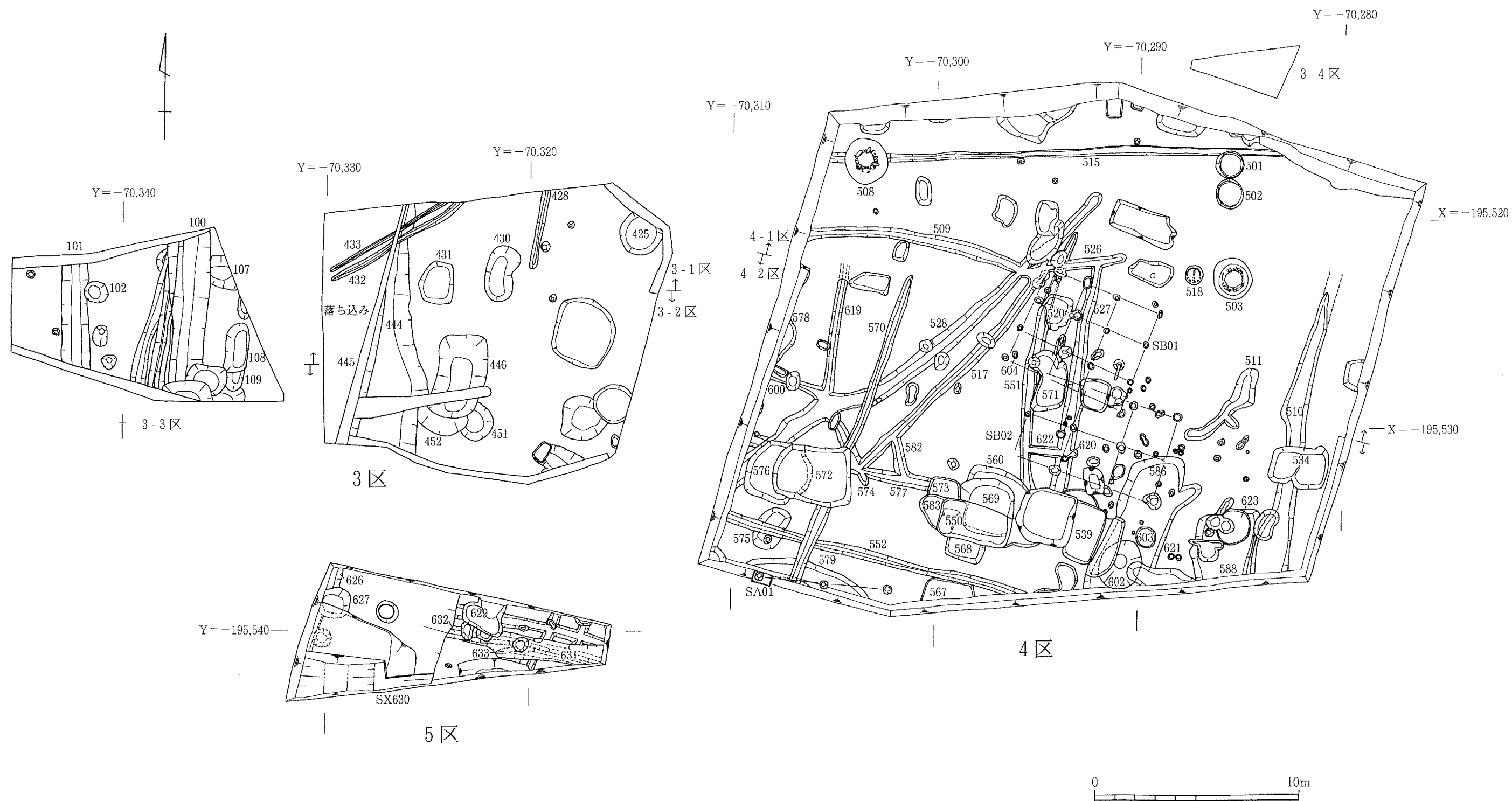
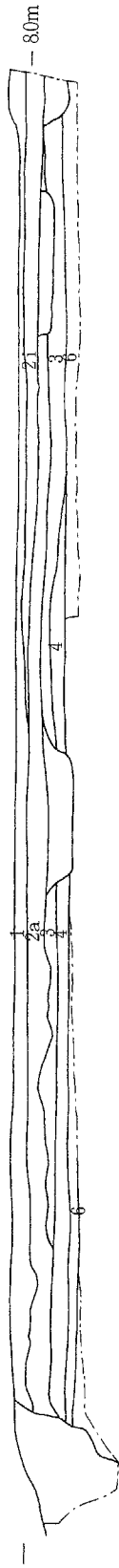


図5 3～5区 平面図

4区 東壁

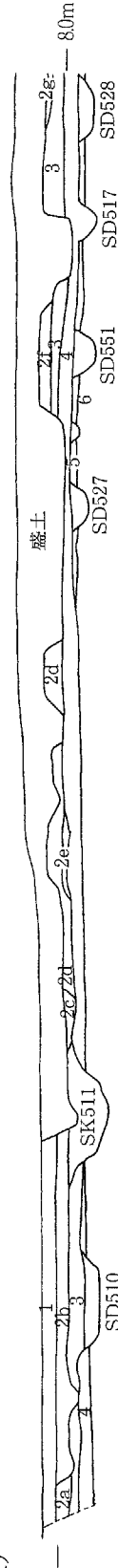
(北)

(南)

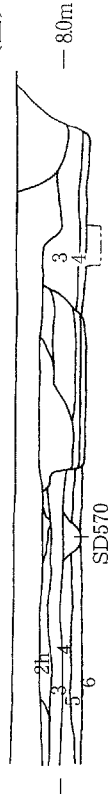


4区 中央部

(東)



(西)



4区 西壁

(南)

(北)

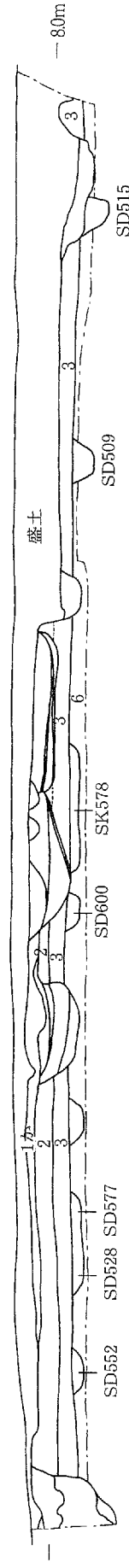


図 6 4区壁面土層図

第2節 遺構

遺構は621基検出した。時代別の内訳は、弥生時代が2基、飛鳥時代が9基、飛鳥時代以降鎌倉時代以前が25基、鎌倉時代が101基、室町時代が4基、江戸時代が480基である。弥生～平安時代の遺構は2区の東半から4区までの微高地状の部分を中心に分布しているものと考えられ、特に4区では各時代の遺構を重層的に確認した。鎌倉時代の遺構は4区に屋敷地を確認したほか、1-1区・5区でも遺構を確認している。室町時代の遺構は少ないが、1-1区、3区、5区で検出した大溝が堀状に巡る可能性が考えられる。江戸時代の遺構は調査区全域で検出し、2-1区では窯跡を確認した。

(1) 弥生時代の遺構

弥生時代後期の土坑とピットを4区で各1基ずつ確認した。遺構埋土は検出面の土と同色だが、砂粒が微妙に多い。

・4区

SK578 大きさ2.0×0.6m、深さ0.2m以上の土坑で、甕底部片が複数出土している。上半は削平を受けている。

SP604 径0.35mのピットで、甕底部片が1点正置された状態で出土した。土器棺墓とも考えられる。

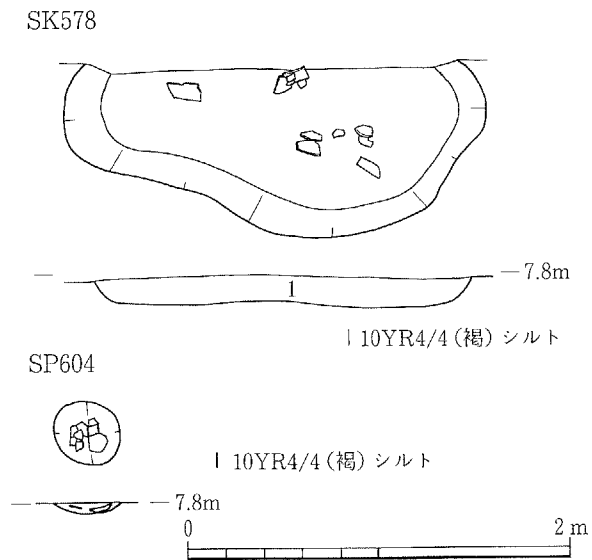


図7 弥生時代の遺構

(2) 飛鳥時代の遺構

飛鳥時代の遺構は調査区の中央から東側にかけて分布している。2区で土坑を2基、3区で土坑3基と溝1条、4区で土坑2基とピット列1列を確認した。

・2区

SK72 2区中央部、土坑115に近接して検出した。一部を江戸時代の遺構により破壊されている。平面規模は3.2～3.0mで方形のプランをもち、深さは2m以上ではほぼ垂直におちる井戸と判断されている。埋土は3層に分けられており、1・2層では多量の須恵器・土師器が出土した。

SK115 2区中央部南で検出した不整形の土坑である。長さ5m以上、深さ約0.6mであるが、近世の溝・土坑・井戸により攪乱を受けており、正確な平面規模は不明である。埋土は2層に区分でき、須恵器・土師器が多数出土している。

・3区

SK107 3-3区の東端で検出した土坑である。東は水道管のため調査できず、西はSD100により切られている。平面規模は短軸が1.5m以上で、深さは0.6m。埋土は2層に分けられる。

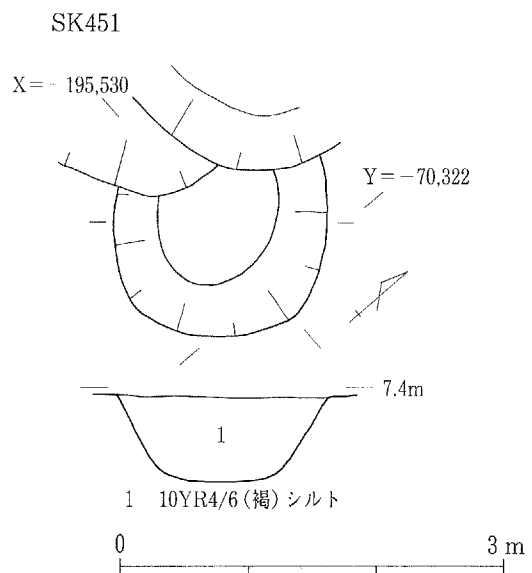
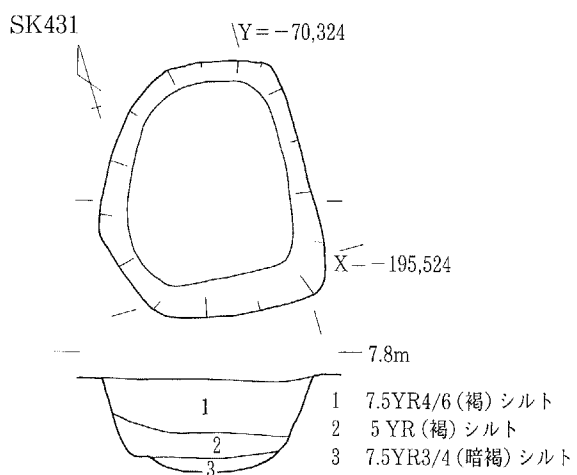
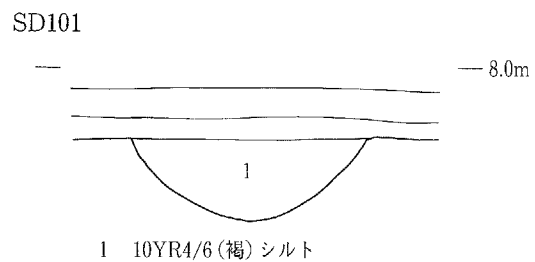
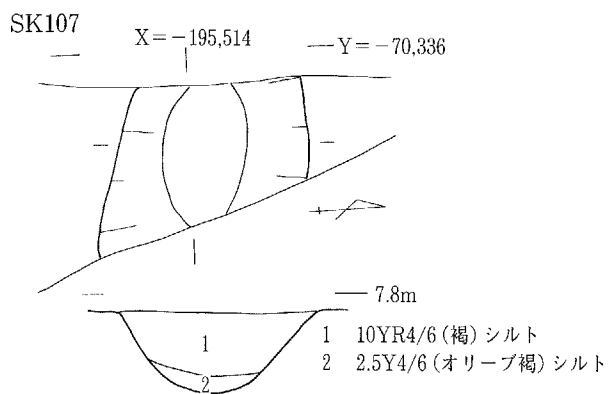
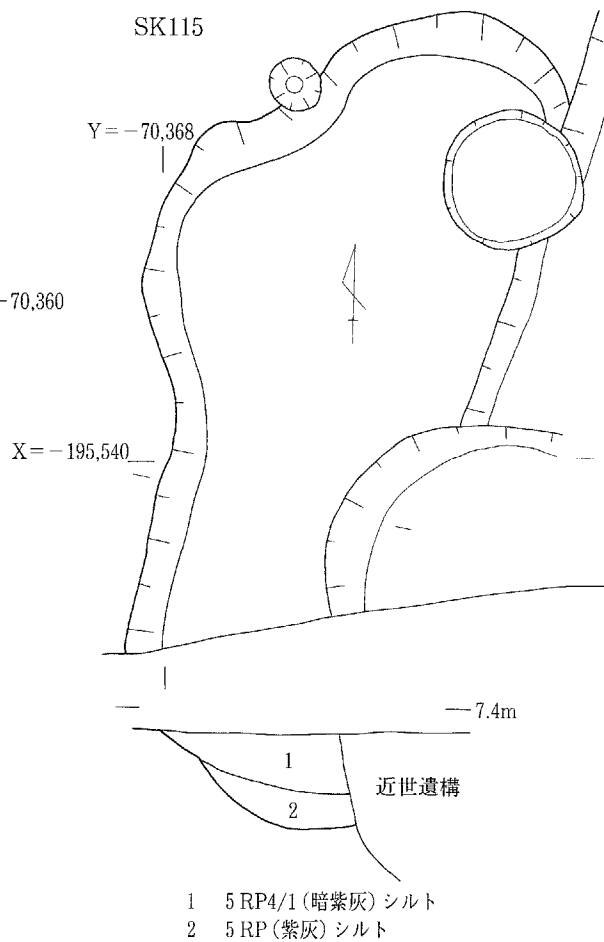
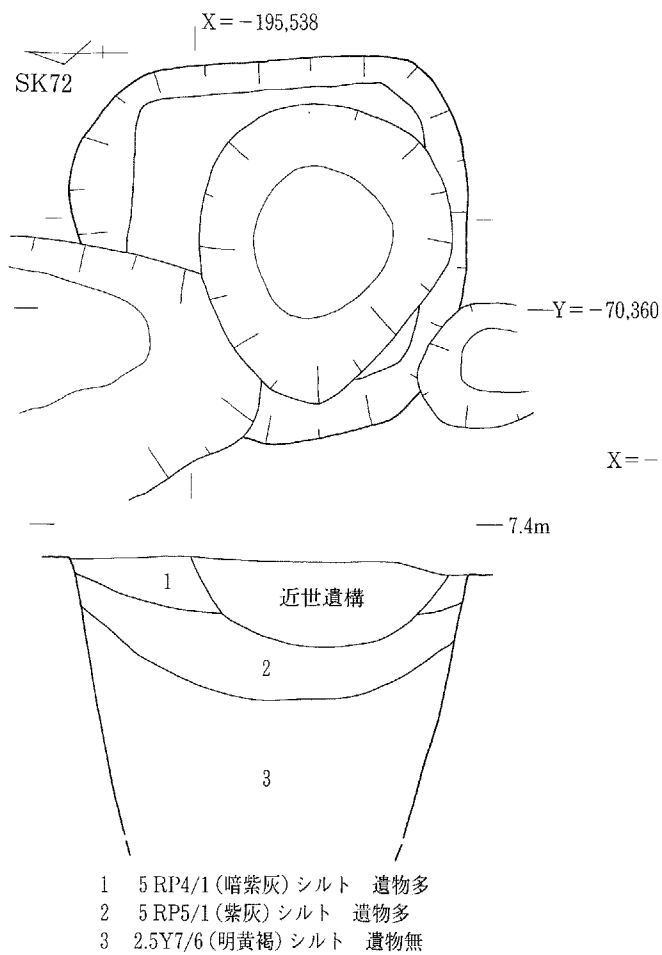
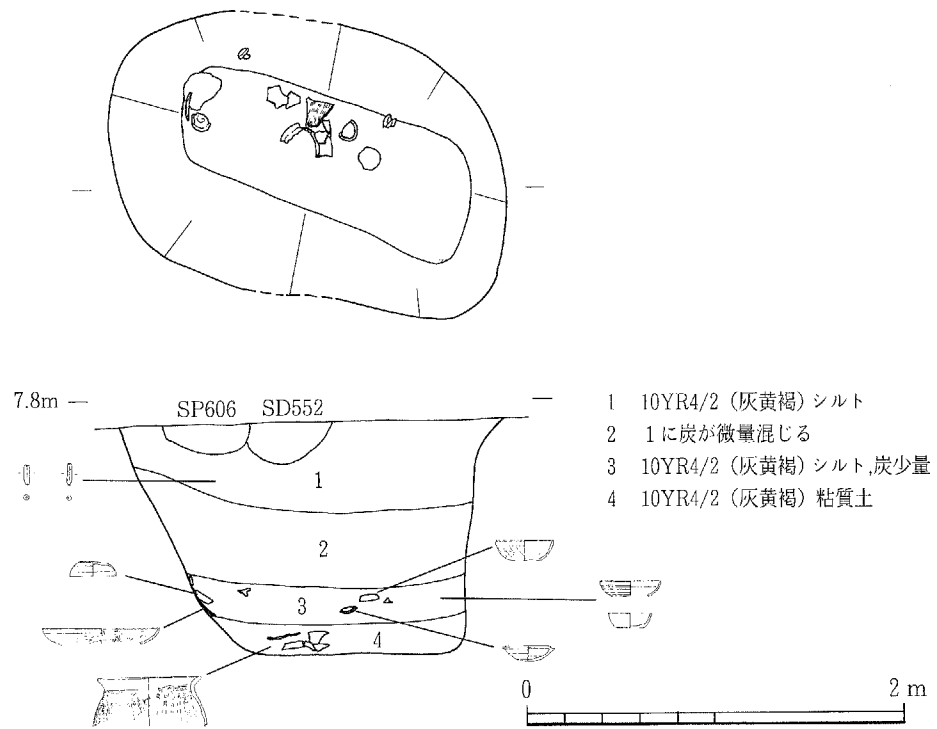
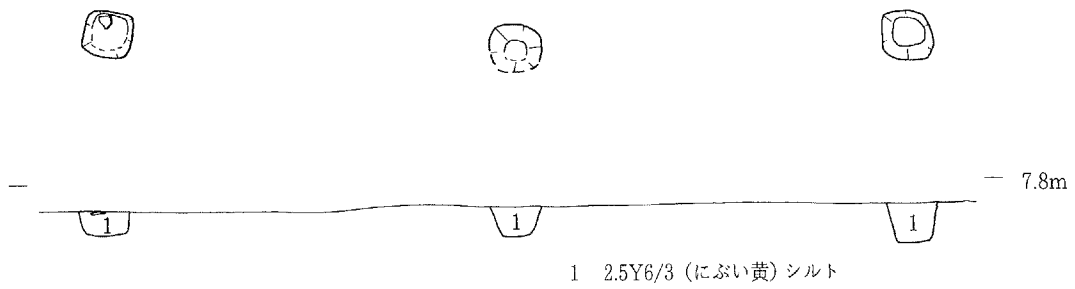


図8 飛鳥時代の遺構①

SK575



SA01



SX579

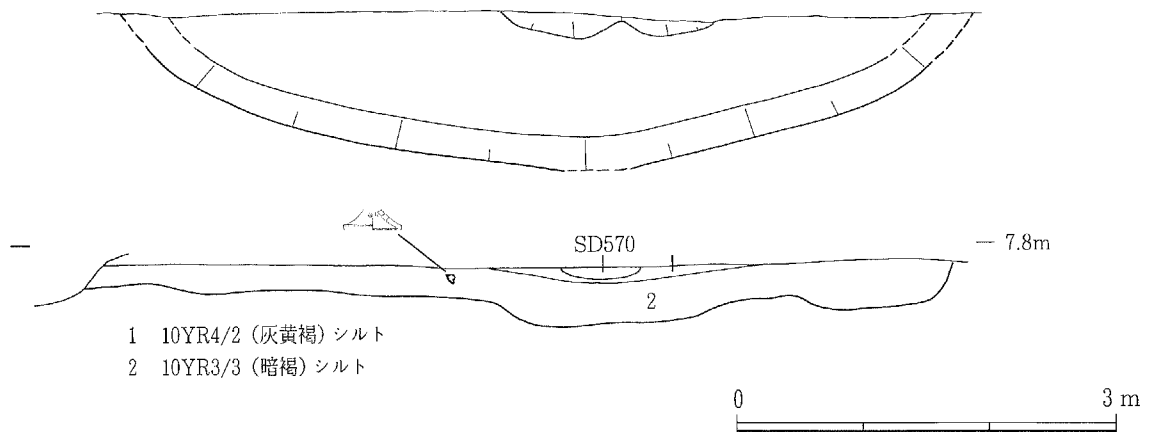


図9 飛鳥時代の遺構②

SD101 3-3区で確認した。幅1.8m、深さ0.6mの南北方向に走る溝である。須恵器・土師器が出土している。

SK431 3-1区で検出した楕円形を呈する土坑である。長軸2.0m、短軸1.6mで、埋土は3層に分層できる。須恵器・土師器が出土している。

SK451 3-2区で検出した楕円形を呈する土坑である。近世の遺構により西側を削られているが、長軸1.8m以上、短軸1.6m以上の規模である。須恵器・土師器が出土している。

・4区

SK575 長軸2.2m、短軸1.4m、深さ1.2mの隅丸長方形の土坑である。1～4層に分層でき、各層の下端で遺物が出土している。須恵器・土師器・土錘等が出土している。

柱列SA01 3.2m間隔で柱穴と考えられるピットの並ぶ、東西方向の列である。各ピットは一辺約40cmの隅丸方形で、須恵器片が2点出土している。調査区南壁にかかっており、ピットのうち1つは壁面を削って検出した。調査区の西・南方向へ続く可能性が考えられる。

SX579 大型土坑の一部である。弥生土器脚部1点と波状紋のある壺片1点、土師器片2点、土錘片1点、須恵器片1点が出土している。遺構の平面形から円形住居と土坑が切りあっている可能性も考えたが、埋土の違いは確認できなかった。

（3）奈良・平安時代頃の遺構

・4区

素掘り小溝群（SD509・515・517・526・527・528・551・552・574・577・582・600・619・622）

幅30～80cm、残存する深さ25～55cmの溝で、底はU字状を呈する。SK575より新しく、SB01・02より古い。埋土は黄褐色のシルトで、土色からは溝同士の切り合いは確認できないが、東西方向の溝の色調が濃い傾向にある。SD509からは須恵器の甕と提瓶片、SD527からは黒色土器と考えられる破片、SD552からは土師器皿が出土している。

・5区

素掘り小溝群（SD632・633他3条） 東西方向3条、南北方向2条の溝を確認した。鎌倉時代の遺構の下層で検出したが、遺物は出土していない。幅、形状、土色から4区の溝と同様の遺構と考えられる。

（4）鎌倉時代の遺構

鎌倉時代の遺構は1区で井戸と推定される遺構1基と土坑2基、ピット29基、4区で掘立柱建物跡2棟と井戸2基、溝1条、土坑4基、ピット48基、その他の遺構2基、5区で性格の不明な遺構を1基確認した。遺構のほとんどは、4区の屋敷地で確認している。

・1区

SE772 県教委の試掘及び、当調査の1-1区下層で検出した径約2.0mの遺構で、調査では深さ約

1 mの円筒形に掘り下げられている。埋土からは土師器鍋や瓦器片が出土しており、鎌倉時代の井戸と推定される。

ピット群（SP750～766・769～771） 出土遺物は確認されていないが、SE772より新しく、落ち込み1より古いことから、鎌倉時代後期頃の遺構と推定される。

・4区

掘立柱建物跡2棟以上、井戸2基、溝1条からなる屋敷地を確認した。遺物の項で後述するように、屋敷地の年代は13世紀後半から14世紀初頭までと考えられる。

掘立柱建物跡SB01 東西3間、南北3間の総柱建物跡である。大きさは東西6.1～6.3m、南北4.8～5.1mである。柱の位置はやや不均等であり、東側列の柱間が広い。柱穴は径20～45cm、残存する深さは6～28cmで、瓦器・土師器が出土している。

掘立柱建物跡SB02 東西3間、南北2間の総柱建物跡である。東西7.1m、南北4.2mで、柱穴12箇所のうち、8箇所を確認、3箇所は他の遺構に削平されており、1箇所は不明であった。柱穴は径30～40cm、深さ0cmで、瓦器小皿等が出土した。

SE602 検出面で長軸2.5m、短軸2.0mの楕円形、深さ約2.7mの井戸である。5層に分層でき、各層から瓦器・土師器等が出土している。3層と4層の間では手箕状の木製品や土器が四角い形状に沿って出土しており、従来は中央に井筒状の部分があった可能性が考えられる。

SE623 検出面で径1.6～1.8m、深さ1.83mの井戸である。5層に分層でき、出土遺物は瓦器・土師器等少量である。

埋桶跡SK603 径0.95m、深さ0.3mの円筒形の土坑である。規格・形状から、埋桶の跡と推定される。検出面で瓦器碗・土師器皿が出土し、14世紀初頭には廃絶していたものと考えられるが、遺構下半からは細片しか出土していない。

SX586 井戸SE602と埋桶SK603の上部を覆う遺構である。出土した遺物から、14世紀初頭の遺構と考えられる。

SX588 井戸SE623の上部を覆う遺構である。井戸廃絶後、間もない時期の遺構と考えられる。

SK571 一辺約1.5mの不整形の土坑である。底部は平坦になっている。

SP621 土師器小皿を5枚重ねて埋納したピットである。

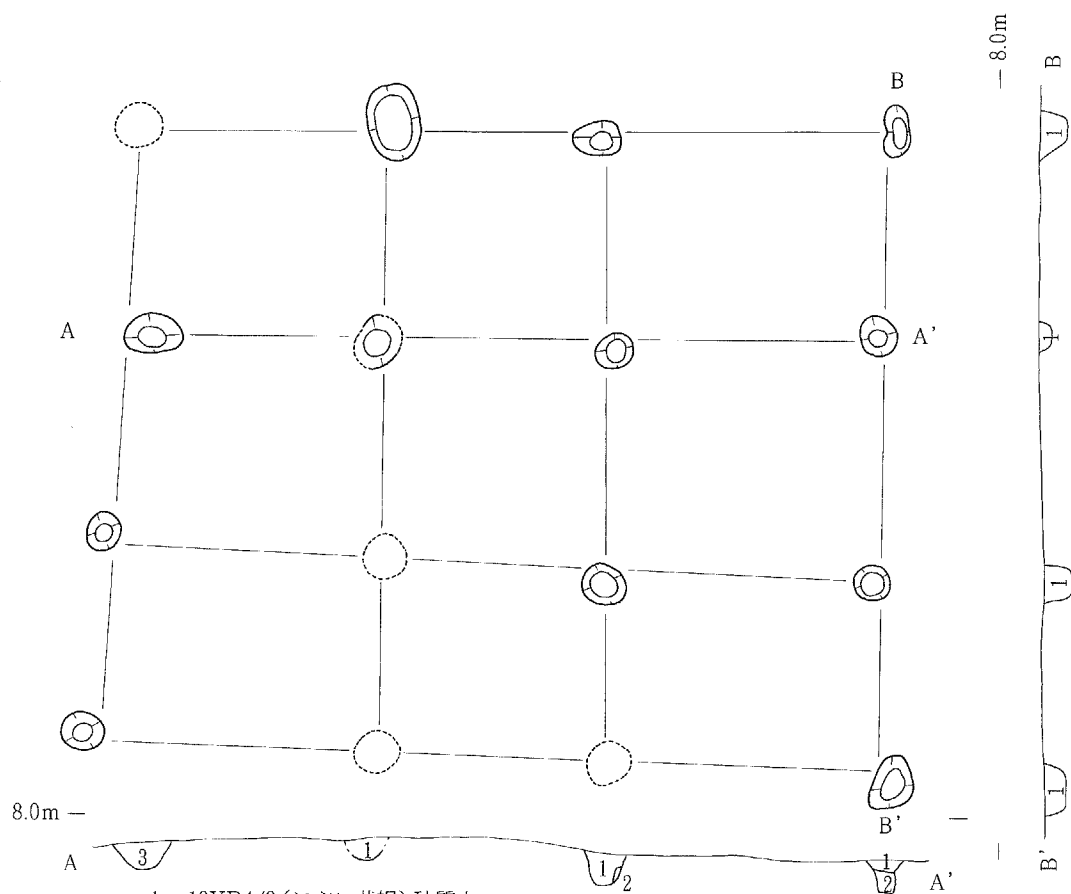
SD510 幅0.9～1.8m、深さ0.3mの溝で、底部はU字形を呈する。溝底部は水平であり、屋敷地の東側を区画する溝と推定される。13～14世紀の土師器・瓦器等が出土した。

・5区

5区では鎌倉時代の遺物包含層があり、その下面で遺構を検出した。

SX631 瓦器片・土師器片を少量含む、浅い落ち込み状の遺構である。素掘小溝を切り込んでいる。

SB01



SB02

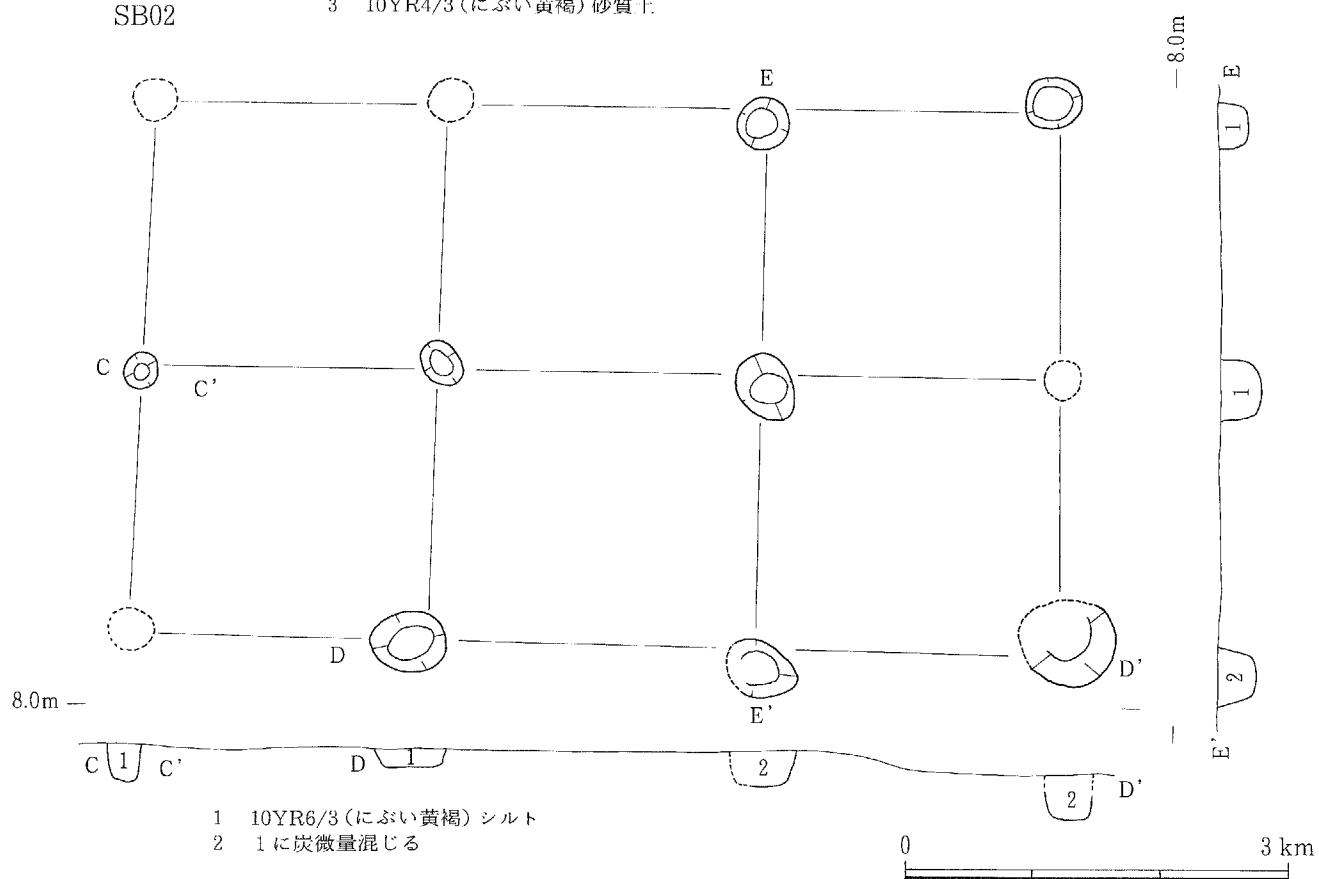
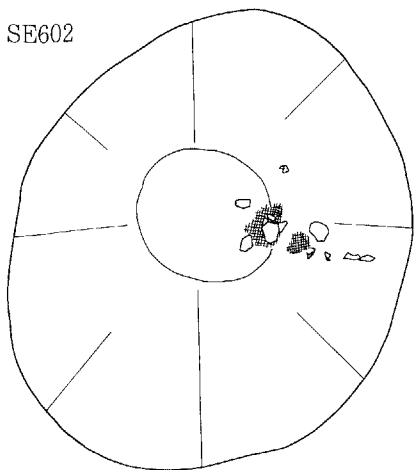
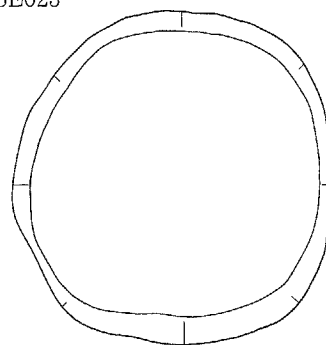


図10 鎌倉時代の遺構①

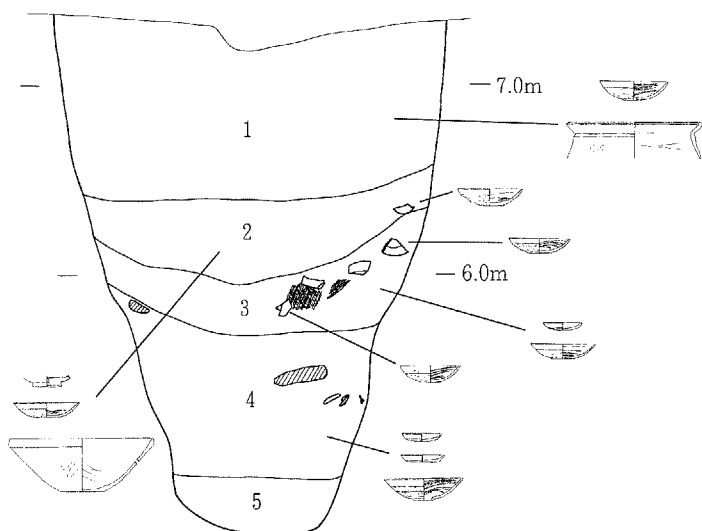
SE602



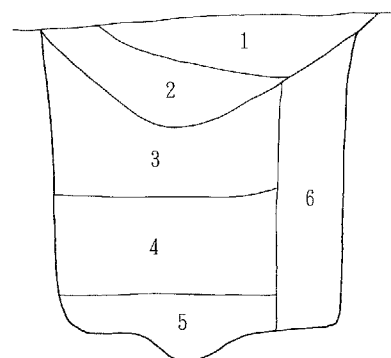
SE623



7.8m —



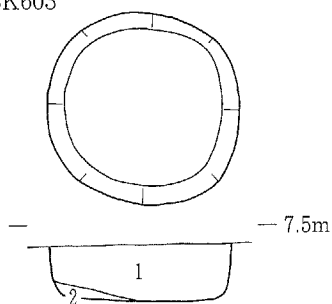
- 1 10YR4/3 (にぶい黄褐) 粘質土
- 2 2.5Y5/2 (暗灰黄) 粘質土
- 3 2.5Y5/1 (黄灰) 粘土
- 4 2.5Y5/4 (黄褐) 粘質土
- 5 5 G5/1 (緑灰) 粘土



- 1 10YR4/3 (にぶい黄褐) シルト
- 2 10YR4/2 (灰黄褐) 粘質土
- 3 10YR4/3 (にぶい黄褐) 粘質土
- 4 2.5Y4/3 (オリーブ褐) 粘質土
- 5 2.5Y3/3 (オリーブ暗褐) 粘土
- 6 10YR3/4 (暗褐) 粘質土

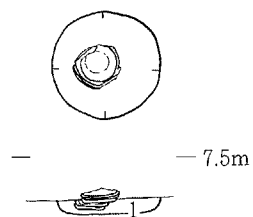


SK603



- 1 10YR4/2 (灰黄褐) 粘質土
- 2 10YR4/4 (褐) 粘質土

SP621



- 1 10YR4/4 (褐) シルト

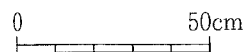


図11 鎌倉時代の遺構②

(5) 室町時代の遺構

室町時代の遺構はすべて溝状の遺構である。3区で大溝、4区で小溝、5区では幅10mを越す大溝を検出した。1・3区で検出した落ち込み状の遺構も遺構の切り合い関係や出土遺物から、室町時代の遺構と考えられる。

・3区

SD100 3区の中央部で検出した南北方向の溝である。幅2.0m、深さ1.2mで、埋土は3層に区分できる。共にシルト質である。15世紀代の遺構と考えている。

・4区

SD570 幅40～80cm、深さ28cmの小溝である。中国製の青磁稜花皿が1点出土しており、15世紀代の遺構と考えている。

・5区(1・3区)

堀状遺構SX630と落ち込み状遺構 5区のSX630は復原幅10.5m、深さ2.9mで、2段階に落ちる大溝状の遺構である。4層上面で検出され、埋土は主に3層に分かれ、肩の部分には地山と類似した土が2層堆積していた。溝の埋土は上層が地山に類似するが締まりのないオリーブ褐色土、中層が灰オリーブ色の粘質土、下層が暗オリーブ灰色のシルトである。備前焼・土師器・瓦の破片が出土しており、室町時代の遺構と評価できる。1区と3区の「落ち込み」については、調査時に近世の河川か落ち込みと判断されたためほとんど掘削されていないが、土層がSX630と共通し、室町時代の遺物が出土している。また、平面的にもSX630の延長にあたることから、SX630と1区・3区の落ち込み状遺構は一連の遺構と考え、堀状の遺構と考えている。

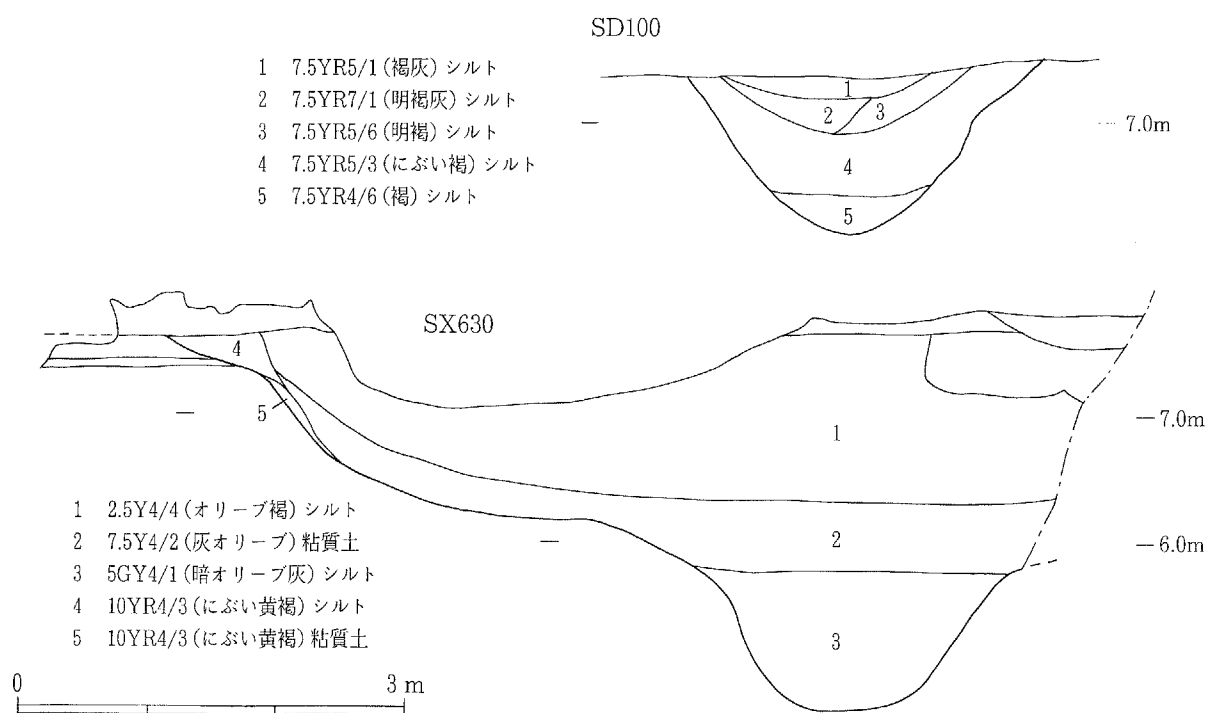


図12 室町時代の遺構

（６）江戸時代の遺構

江戸時代の遺構は調査区全域で検出している。遺構総数は480基で、内訳は1区が163基、2区が213基、3区が25基、4区が67基、5区が12基である。遺構の種類としては井戸・埋桶・土坑・溝・窯がみられ、井戸には素掘りと石組、土坑には不整形のものと隅丸方形のものが見受けられる。

遺構の大半は18世紀のもので、一部19世紀の遺構が確認される。17世紀の遺物は少量出土しているが、18世紀代の遺物と共伴しており、17世紀と判断できる遺構はない。

・1区

素掘小溝群（SD18～20・28～36・408・419・413・421～423） 幅10～20cm、深さ2～20cmの鍬溝である。方形の土坑38・39に先行する。

・2区

窯跡SX97・98 江戸時代後期の陶磁器類焼成窯である。円形の燃焼部を有し、南に焚口部が開口する。97と98の2基が並列しており、97からは戸車を転用した窯道具が出土している。すぐ西側には緑泥片岩を用いた低い石垣があり、その段差から窯の周辺にかけて盛上されている。調査時には記録保存対象外の新しい遺構と認識していたため、図化等の処置はとられていない。窯道具に付着した釉薬から陶磁器類を焼成したことが分かるが、詳細は不明である。

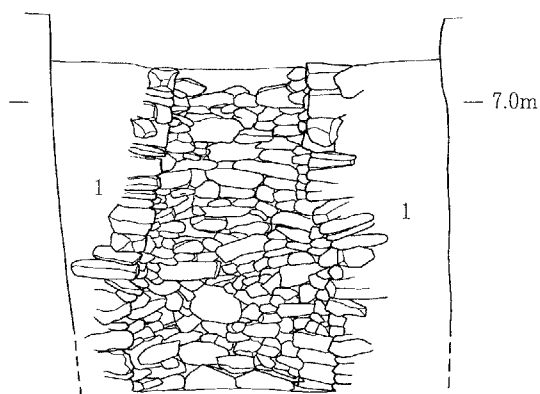
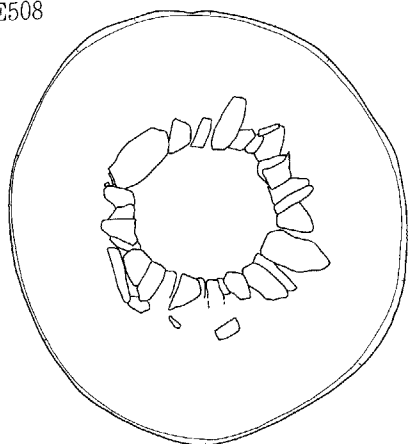
・4区

埋桶跡（SK501・502・518） 桶を埋めた円筒形土坑である。土坑の底部に桶の縁の痕跡が残っており、501・502は径120cmの円形の桶の跡が確認できる。SK518は径70cmで、桶の中央に渡した部材の痕跡を残している。

石組井戸（SE503・508） 緑泥片岩の小口面を内側に向けて構築した井戸である。検出面では径約0.7mであるが、中央から下部はやや膨らんでおり、径約1.0mとなる。SK503からは17世紀代の肥前系白磁皿や三島手唐津から18～19世紀の堺焼播鉢までの多数の陶磁器のほか、竹管や分銅形土製品等が出土している。分銅形土製品は海南市岡村遺跡の平成10年度調査でも同様の石組井戸から出土しており、釣瓶の重りなど井戸で使用されていた製品である可能性を考えている。SK508では18世紀以降現代までの陶磁器・瓦が出土している。1.7～2.0m掘り下げた時点で周囲に亀裂が入ったため、完掘はしていない。

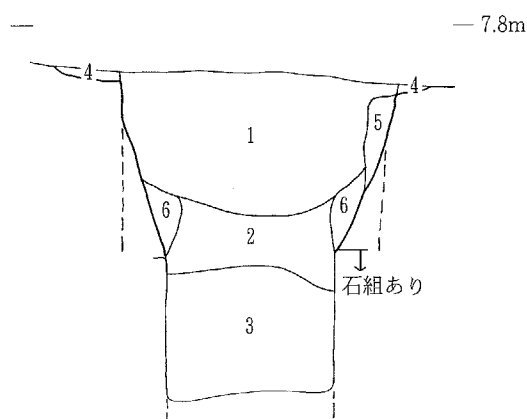
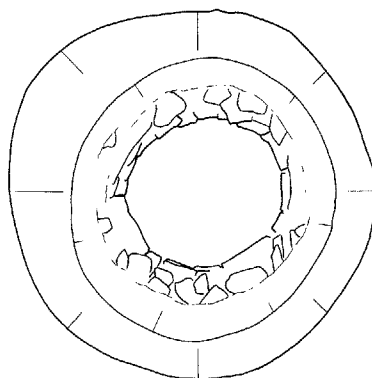
方形土坑群（SK539・540・550・560・567・568・569・572・573・576・583・585） 大半が調査区の南側に並んだ状態で検出された。遺構の性格は不明であるが、切り合いの状況から、少なくとも粘土採掘坑ではないことは明らかである。平面形は一辺2～3m、残存する深さが20～30cm程度のものが多く、底部は平坦である。18世紀の遺物が多く出土しているが、SK539・540・550には19世紀の遺物が含まれている。

SE508



1 10YR4/3~5/4 (にぶい黄褐) シルト

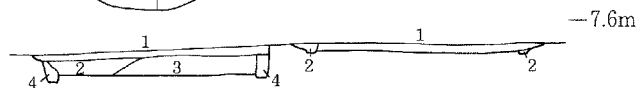
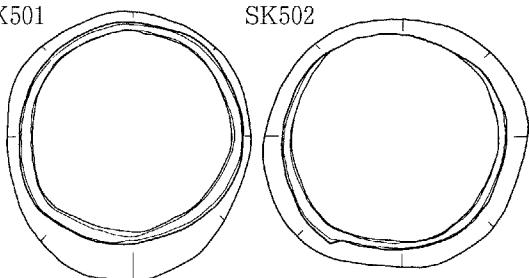
SE503



- 1 2.5Y5/4 (黄褐) シルト
- 2 1に4が混じる
- 3 4に1が混じる
- 4 2.5Y6/2 (灰黄) 粘質土
- 5 2.5Y6/1 (黄灰) 粘質土に2.5Y5/4 (黄褐) シルト混じる
- 6 5GY5/1 (オリーブ灰) 粘土

SK501

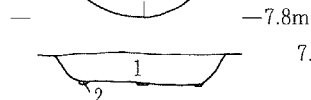
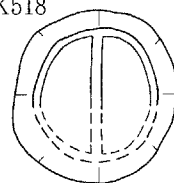
SK502



- 1 5Y6/2 (灰オリーブ) シルトに2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じる
- 2 1に3が混じる
- 3 2.5Y5/4 (黄褐) シルト
- 4 5Y6/2 (灰オリーブ) シルト
- 1 SK501の1層と同じ
- 2 SK501の4層と同じ

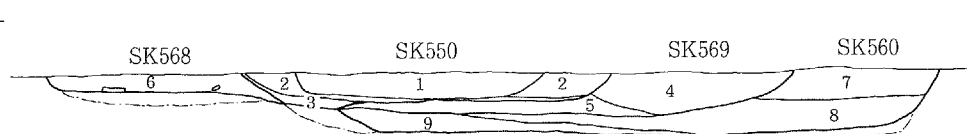
SK518

SP620



- 1 5Y5/1 (灰) シルト
- 2 5Y5/1 (灰) 砂質土

- 1 2.5Y6/2 (灰黄) シルト
- 2 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト



- 1 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト
- 2 2.5Y5/4 (黄褐) シルト
- 3 5Y6/2 (灰オリーブ) シルト
- 4 5Y6/2 (灰オリーブ) シルト
- 5 2.5Y5/5 (にぶい黄) シルト
- 3 5Y6/1 (灰) シルト
- 7 2.5Y5/3 (黄褐) シルト
- 8 2.5Y4/3 (オリーブ褐) シルト
- 9 5Y5/1 (灰) シルト

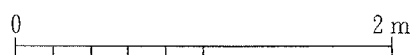


図13 江戸時代の遺構

第3節 遺物

出土遺物はコンテナ48箱分あり、総数5,890点であった。およその内訳としては、土師器9箱、須恵器4箱、瓦器3箱、陶磁器27箱、瓦3箱、その他の弥生土器・黒色土器等が2箱である(時代別の内訳は表2参照)。遺物の説明は時代、調査区、種類(井戸・土坑等)、遺構番号の順に並べて記述した。

(1) 弥生時代の遺物

弥生時代中期と後期の遺物が少数あるが、中期の遺物は飛鳥時代の遺構の混入品である。後期の遺物は4区の土坑・ピットから出土した。

1はSX579から出土した弥生土器高坏脚部。当遺跡では最も古い弥生時代中期の遺物であるが、同遺構からは須恵器片等が微量出土している。胎土に片岩やクサリ礫を含み、外面にミガキ、内面にナデ調整を施す。裾に黒斑を有し、孔は3孔である。

4区SK578出土遺物 2は弥生土器甕の底部。外面タタキ、内面はハケメ。やや底部が尖底化しつつあり、弥生時代の終末期にあたるものであろう。

SP604出土遺物 3は弥生土器甕の底部。外面はタタキ、内面は板状工具によるナデ。底部は平底である。SP604出土。

(2) 古墳時代の遺物

古墳時代後期の遺物が2点あるが、共に飛鳥時代の遺構から出土している。

4は須恵器坏蓋。口径14.1cm、器高3.3cm。田辺編年TK10型式に相当する。SK451から出土した。5は円筒埴輪の底部。復原底径24.0cm。外面タテハケ、内面指頭圧。5世紀末～6世紀前半。SK115の上層から出土している。

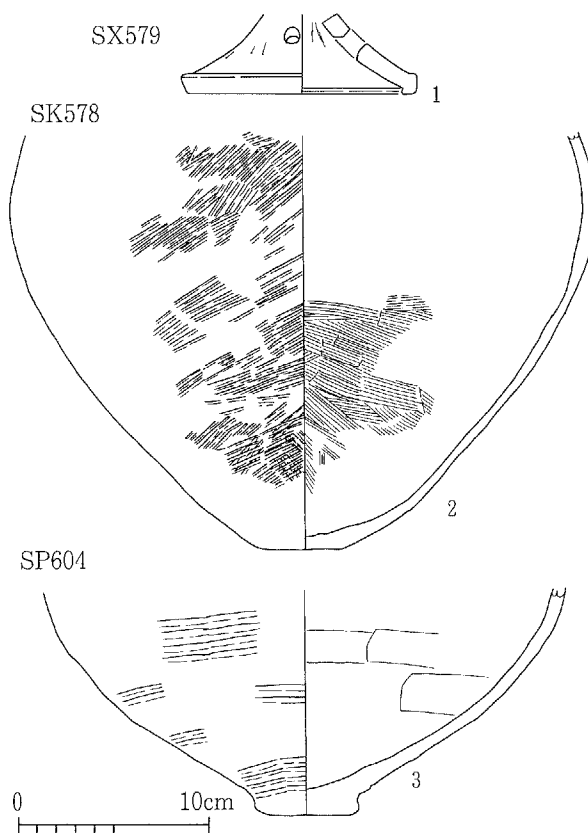


図14 弥生時代の遺物

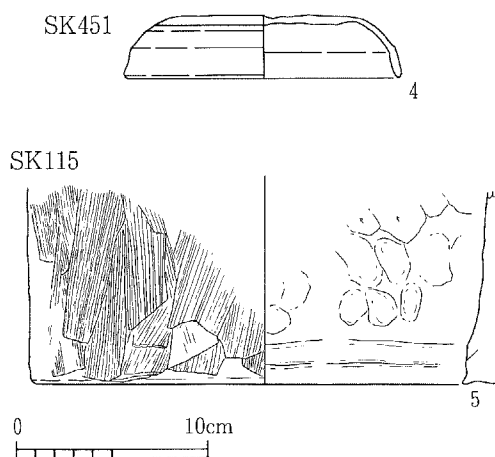


図15 古墳時代の遺物

(3) 飛鳥時代の遺物

飛鳥時代の遺物は土坑等の遺構から出土しており、包含層からはほとんど出土していない。

2区・SK72出土遺物 コンテナ3箱分、破片数にして313点出土している。6～25は須恵器である。6～16は坏蓋。6は摘みとかえりのあるもので、口径10.5cm、高さ3.1cm、上面に自然釉がかかり、硬質に焼成されている。7～16は摘み・かえりはなく、回転ナデがはっきりとする。上端は回転ヘラ切り。口径は10.3～12.0cm、器高3.3～3.7cmであるが、16だけが口径15.3cm、器高4.4cmと大きい。焼成は13・15が堅緻、11・12・14が硬質、7～10・16が軟質である。17～21は坏身。17は立ち上がりのあるもので、口径8.2cm、器高3.0cm、硬質に焼成される。18～21は底が平坦で、体部が斜め上方へ開くものである。口径9.8～10.3cm、器高3.4～4.2cmである。22・23は高坏。24は提瓶。25は壺。

26～29は土師器である。26～28は坏、29・30は高坏、31・32は鉢と考えられる。27～30の内面には放射状暗紋、31の内面には放射状暗紋と螺旋状暗紋が施されている。32は内外面共にハケメ調整を行う。33は高坏。34～36は甕。外面はハケメ、内面はナデ・ユビオサエを行う。37は鍋と考えられる。38は把手。39は不明土製品。底部中央に焼成前に作った孔がある。粘土紐を積み上げて体部を作っているが、下から2段分しか残存しない。40は土錘。

SK115出土遺物 41～45は須恵器である。41～43は坏蓋。41は頂部に宝珠摘みがあり、口縁部内側に短いかえりをもつ。口径10.2cm、器高3.2cm。44は坏身。立ち上がりは短く内傾しており、口径8.2cm、器高2.9cm。45は須恵器の作りをしているが、土師質焼成の坏。46～48は土師器である。47・48は高坏の脚部。46は小型の壺甕類の口縁部片。このほか、上層から埴輪片(5)が出土しているが、古墳時代の出土遺物の項に記載している。

3区・SD101出土遺物 49～51は須恵器である。49は高坏、50は壺、51は甕である。ともに上半を欠失している。

SK107出土遺物 52は須恵器坏蓋。口径10.5cm、器高3.6cm。

SK451出土遺物 53～57は須恵器。53～55は坏蓋。53は口径が小さく、器高が高い。54は天井が回転ヘラ切りで、口縁は下方へ折れ曲がる。55はやや丸みのある形状を呈する。56・57は坏身。56は底部・体部が直線的で、口縁部内側の立ち上がりは短い。57は焼成不良で灰白色を呈する。58は放射状暗紋のある土師器坏身。このほか、古墳時代の須恵器(4)が出土している。

4区・SK575出土遺物 59～61は須恵器である。59は坏蓋。60・61は坏身。径は9.0～9.7cmと小さ目である。60の口縁部立ち上がりは短い、やや上方を向く。62～66は土師器である。62・63は坏身。64は放射状暗紋のある皿。65・66は甕。67・68は土錘。69は両端に打痕のある石。

SD509出土遺物 70は須恵器大甕。口頸部は外反するが、端部は内彎する。肩の四方に、粘土粒を指で押しつけている。同じ溝からは須恵器の提瓶片等が出土している。

SK72

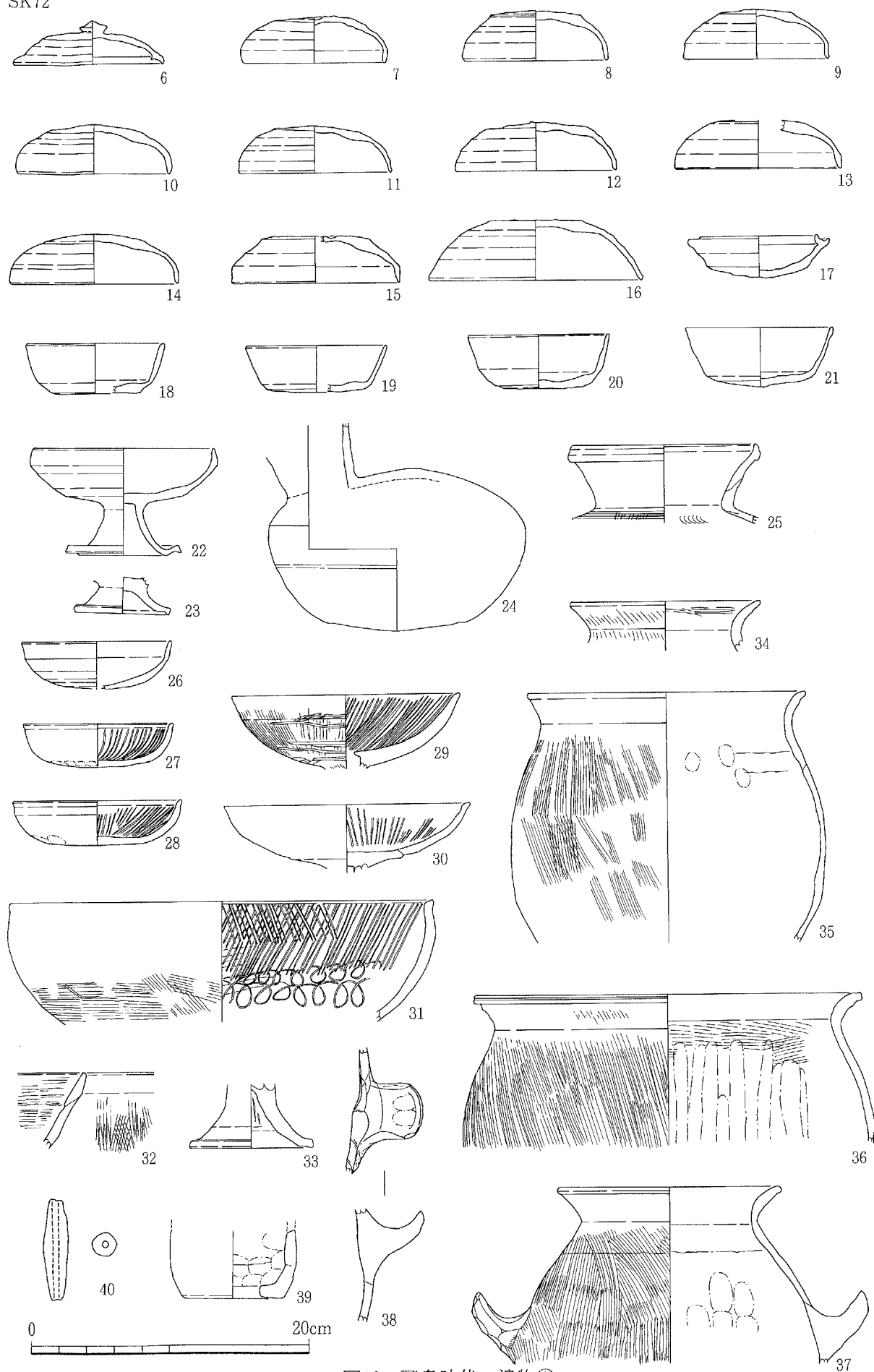


図16 飛鳥時代の遺物①

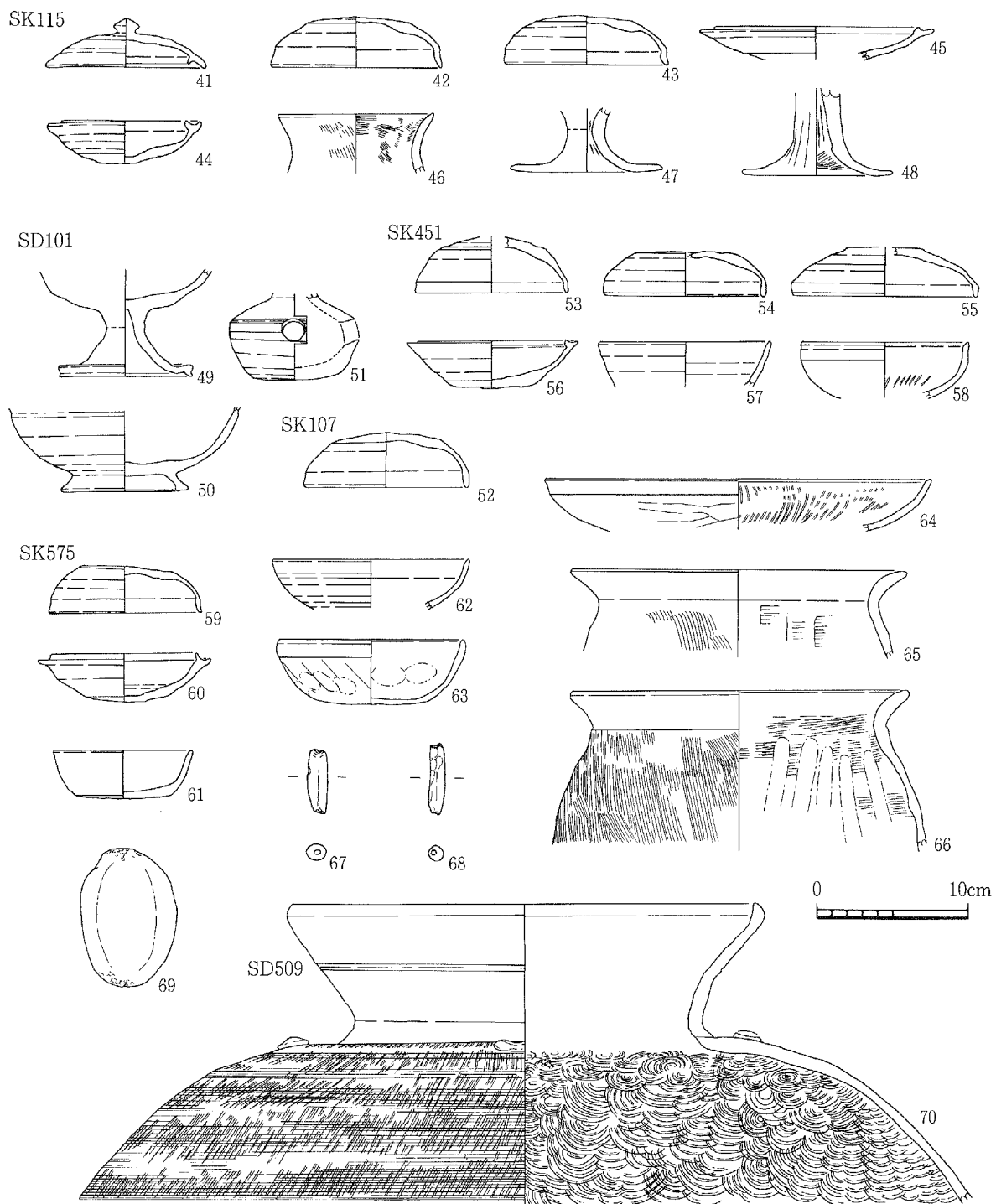


図17 飛鳥時代の遺物②

(4) 奈良・平安時代の遺物

4区の小溝群から、少数出土している。

4区・SD527出土遺物 71は黒色土器。内面を黒色処理し、磨いている。

SD552出土遺物 72は土師器皿。底部は平坦で体部はやや内彎して立ちあがる。

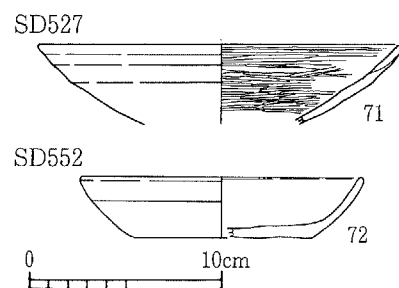


図18 奈良・平安時代の遺物

（５）鎌倉時代の遺物

鎌倉時代後期の遺物が、４区の屋敷地を中心に多数出土している。井戸と井戸埋立て遺構から出土した遺物は、周辺地域の13世紀後半から14世紀初頭の遺物変遷を検討するための良好な資料といえる。

＜掘立柱建物柱穴出土遺物＞

４区SB01出土遺物 73はSB01の柱穴547から出土した、瓦器碗である。口径13.7cmに対して器高3.5cmと低く、高台も粗雑である。

SB02出土遺物 74はSB02の柱穴566から出土した瓦器小皿である。復原口径7.9cmで、口縁部は外反する。

その他柱穴出土遺物 75・76は柱穴538から出土した。75は瓦器碗。76は土師器皿。

＜井戸・埋桶・井戸埋立て遺構出土遺物＞

４区・SE602出土遺物 77～87は瓦器である。77～84は瓦器碗。口縁端部は丸く、粗雑な高台が付く。４層から77、３層から79～82、１・２層から78・83・84が出土している。77は口径16.2cm、器高4.5cm、粗雑ながら断面三角形の高台を有する。84は口径13.5cm、器高3.5cmで、高台の位置に粘土を擦り付けただけの状態である。85～87は瓦器小皿。口径は7.9～9.1cm。88は青磁碗。89は瓦質土器甕の口縁部。東播系須恵器を模倣している。90は東播系須恵器こね鉢。復原口径約30cm、器高約11cm。91・92は土師器土釜。頸部は屈曲し、口縁端部は上方に突出する。肩には突帯を貼り付け、外面全面に煤が付着する。91は体部が下方へ伸び、92は体部が丸い。

SE623出土遺物 93は瓦器碗口縁部片で、体部はやや開き気味である。94は瓦器碗底部片で、高台は断面台形。

SK603出土遺物 95は瓦器碗。高台を消失し、坏状を呈する。口径12.0cm、器高3.0cm。胎土に砂粒を多く含み、焼成はあまい。96は土師器皿。復原口径13.9cm、器高2.8cm。体部に段差を有する。共に検出面で出土したものであり、SX586の遺物である可能性も考えられる。

SX586出土遺物 97は土師器皿。98・99は瓦器碗。高台を消失し、坏状を呈する。胎土は粗く、焼成は不良。黒色処理はされているが、生焼けの乳白色からやや土師質がかった黄土色を呈する。高台を有する瓦器碗の破片も出土しているが、微量であり混入品と考えられる。100は砥石。

SX588出土遺物 101は土師質の皿。底部は指押さえ。102は瓦器碗の底部。高台は粗雑で低い。

＜溝・土坑・ピット出土遺物＞

４区・SD510出土遺物 103・104は土師質の小皿。105は土師器皿。106は高台を欠失した瓦器碗。107は土師器土釜。

SK571出土遺物 108は瓦器碗。109は土師質の鍋。

SP621出土遺物 110～114は土師器小皿。５枚重なった状態で出土した。

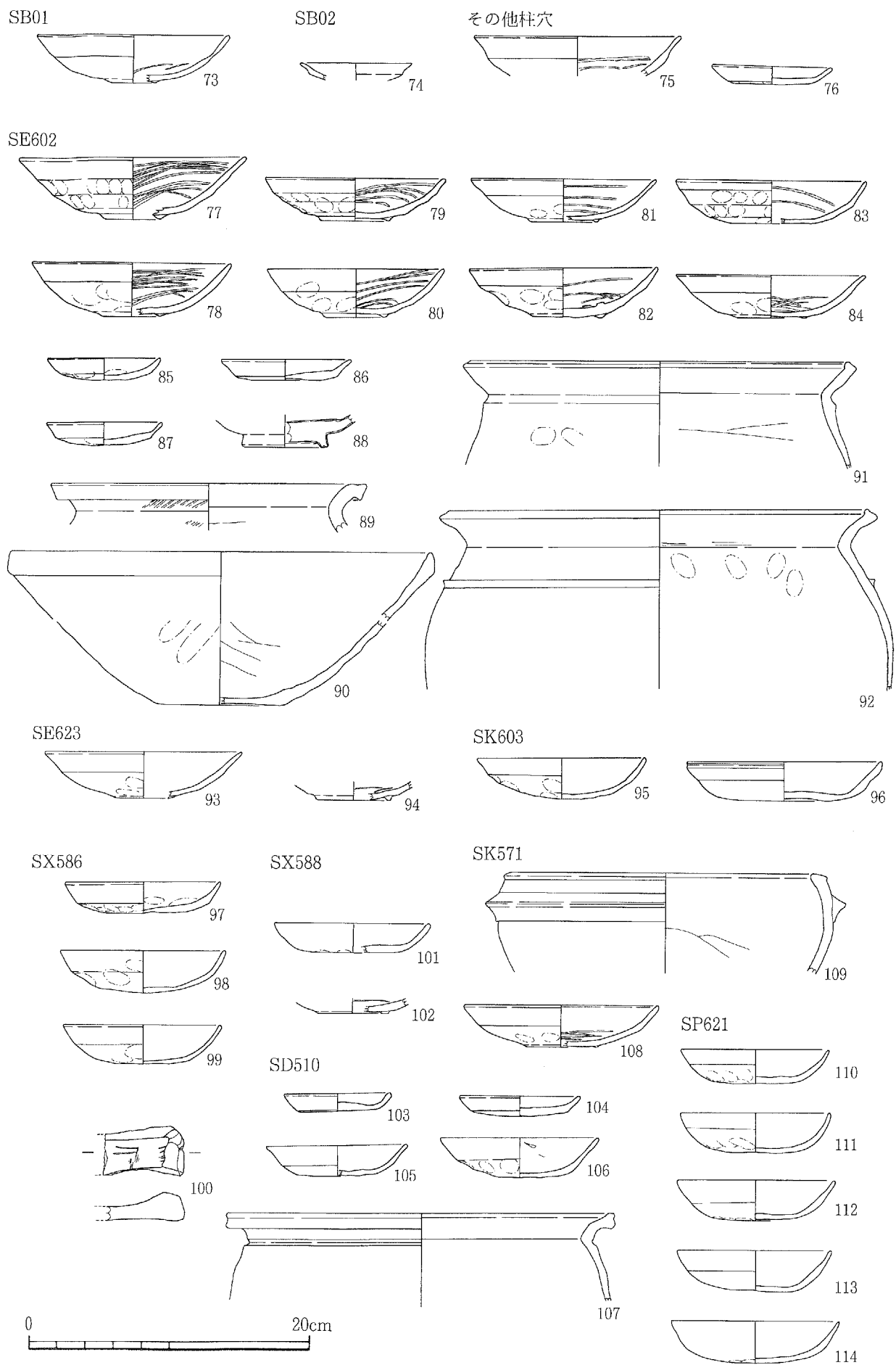


図19 鎌倉時代の遺物

(6) 室町時代の遺物

室町時代の遺物は、調査区全体に散在する大小の溝から、少量出土している。破片が多く詳細な年代は判然としないが、15世紀代の遺物が確認できる。

<堀状遺構出土遺物>

1区落ち込み出土遺物 115は巴紋軒丸瓦の瓦当。1区の落ち込みに設定した1トレンチから出土した。巴の尾が長く、連珠が20個巡る。瓦当の中央はざらつき、周囲の土手部は平滑でキラコが付着する。丸瓦との接合部を轆轤状に搔く。この他、道具瓦と備前焼の破片等が出土している。

3区落ち込み出土遺物 土師皿・陶器体部片・焼土塊の細片が小数出土している。

5区SX630出土遺物 116はSX630下層から出土した瓦。幅が約18cmと短く、土塀や小型の掛平瓦等の可能性が考えられ、水切り状の突帯が付く。竈等に転用した物とみえ、内面に煤が付着している。このほか備前焼壺、土師器土釜、瓦器、東播系須恵器捏鉢の細片が出土している。

<溝出土遺物>

3区SD100出土遺物 117は中国製白磁皿。4箇所に抉りを入れる割高台で、見込には砂目の跡がみられる。118は中国製青磁碗。119・120は土師器土釜。口縁部が屈曲し、端部が上方へ伸びる。体部は下方へ伸びる。121は瓦質土器土釜。122は土錘。

4区SD570出土遺物 123は中国製青磁稜花皿。高台の途中まで釉薬がかかり、底部は露胎。

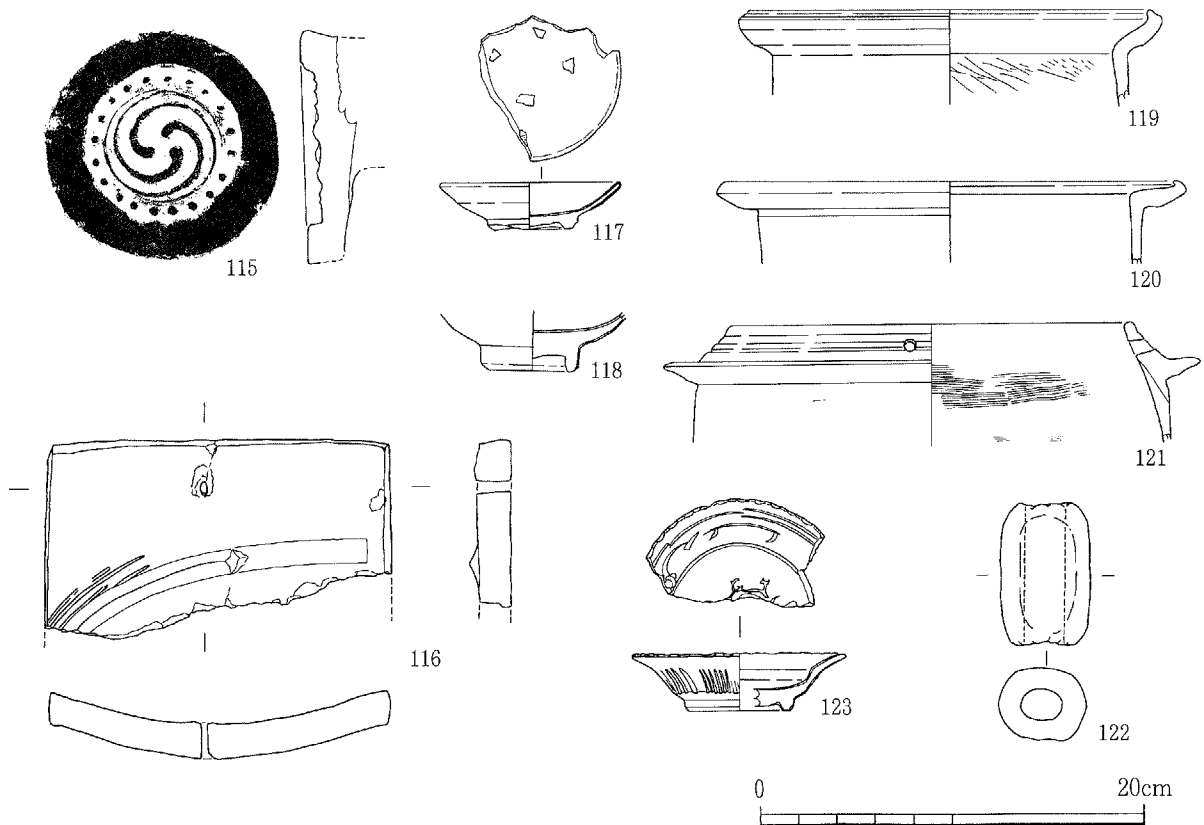


図20 室町時代の遺物

(7) 江戸時代の遺物

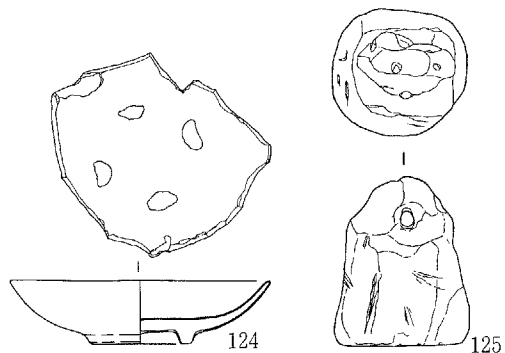
江戸時代の遺物は調査区全域から出土している。出土遺物はコンテナ28箱分あり、その大半が遺構内から出土している。遺物は17世紀から19世紀前半までのものが出土しているが、18世紀代の遺物が多い。多量に出土した陶磁器類としては、肥前系陶磁器・瀬戸美濃系陶磁器のほか、備前焼・堺焼・丹波焼・大谷焼等がみられる。そのほか、分銅形の土製品や戸車を転用した窯道具などが出土している。

124・125は石組井戸503から出土した。124は白磁皿、125は分銅形土製品。内実で、径8mmの孔が空く。海南市岡村遺跡の平成10年度調査の井戸SE01出土異形土器等の類例^{註4}があり、井戸で釣瓶の一端に付けた錘と推定している。重さは376g。126・127は石組井戸508から出土した丹波焼徳利である。全面褐釉で、イッチンによる銘を二方向に入れる。126には「□孫店」、127には「□□店」と「…十二」と書かれている。128は遺構620に据えられていた埋甕。外面は泥醬の上に釉をたらしている。江戸時代前半の丹波焼と推定される。129～135は隅丸方形の土坑から出土した遺物である。129～132はSK117（SE117・SK189も同一遺構）出土。129は京信楽系陶器の灯明皿。130は大谷焼壺甕類の体部を転用した面子。131は土製品の鈴。132は土錘。134は遺構540で出土した広東碗。133は遺構572で出土した石製品。砥石のほか周囲からの鉄片の出土と鉄分の塊の付着から、金床石の可能性を考えている。135は土師質土器。焼成前に、底部に径2cmの縦向きの穴と、径3～5mmの横向きの穴が空けられている。植木鉢のほか砂糖壺の可能性を考えているが判然としない。136・137は窯97で出土した。136は建具の戸車を転用した窯道具。戸車を横にして砂を引き、窯道具として転用^{註5}しており、銅緑釉とみられる釉薬が高台の形に付着している。137は巴紋軒丸瓦の瓦当。巴紋の尾は115に比べ短く、珠点は16個、縁が幅広となる。138・139はSK78で出土した硯と水滴。

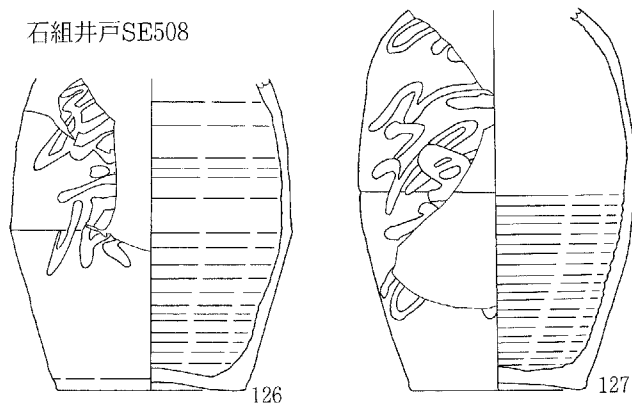
140はSK181出土、中国製染付皿。見込に蛟竜を描く。胎土目の重ね焼き痕がみられる。141はSE51出土、肥前系染付皿。142はSE446出土、肥前系染付鉢。見込みに五弁花紋を手書きし、底部には「大明成化年製」の銘を入れる。143はSK22出土、染付丸碗。外面丸紋で、口縁部内側に四方嚮、見込にコンニャク印版の五弁花、底部に「寿」の銘を入れる。144はSK327出土、肥前系陶器の京焼風碗。見込に風景を描き、底部に「新」と刻印される。145はSK38出土、瀬戸美濃の小型壺。黒色の釉薬をかけ、菊花のスタンプを押す。146はSK146出土、肥前系染付筒形碗。147はSK192出土、陶胎染付筒形碗。148はSK146出土、陶器小碗。149はSE308出土、磁器の小杯。150はSD7出土、台付灯明台。上面は透明釉をかける。151はSK352出土、香炉か線香立て。外面から口縁部内側まで、透明釉をかける。152はSK448出土、土瓶形のミニチュア土製品。153はSK106出土、獅子形のミニチュア土製品。154はSE14出土、瓦質土器火鉢。獸頭を型押しした獸足を3足もつ。155はSK192出土、瓦質土器火鉢。156はSK323出土、肥前系陶

器折縁皿。灰釉で、内面に胎土目の重ね焼き痕跡が3箇所ある。157はSK53出土、土師質の焙
 烙。体部の稜はあまく、底部は離れ砂を使用。158はSE446出土、唐津刷毛目鉢。159はSK13出
 土、備前焼播鉢。160はSE308出土、堺焼播鉢。

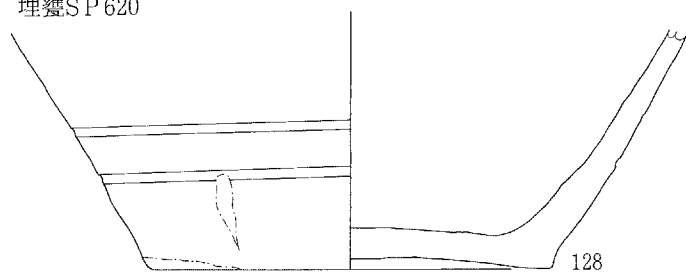
石組井戸SE503



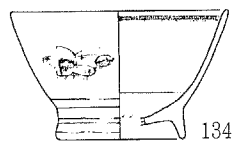
石組井戸SE508



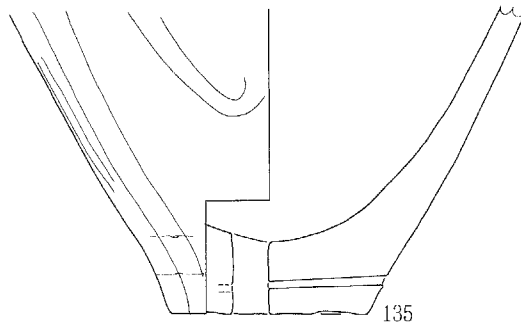
埋甕SP 620



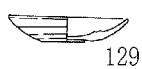
SK540



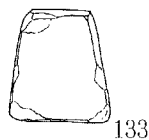
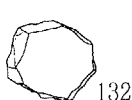
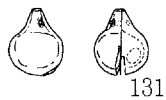
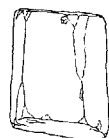
SK576



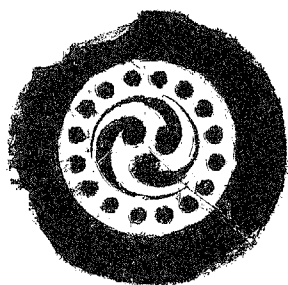
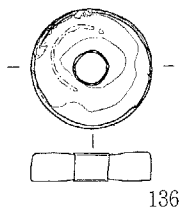
SK117



SK572



窯97



SK78

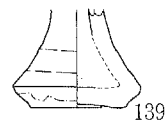


図21 江戸時代の遺物①

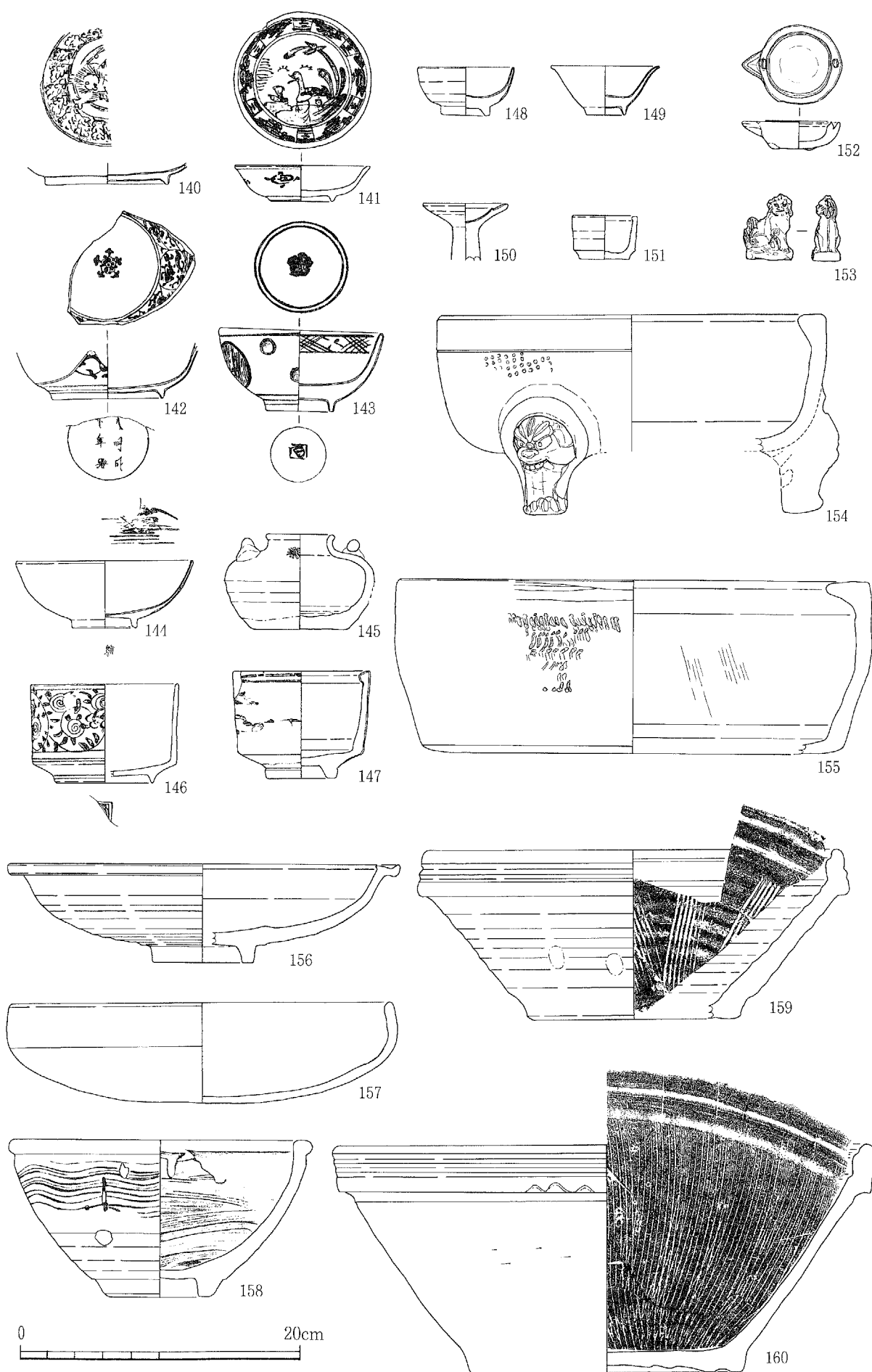


図22 江戸時代の遺物②

第3章 遺跡の変遷

岩橋高柳遺跡は、彌宜貝塚の終息する縄紋時代後期以降に形成された紀ノ川南岸の自然堤防上に所在するものと考えられる。弥生時代以前に陸化して微高地状を呈しているものとみられ、4区の側溝では弥生時代の遺構面の約15cm下により安定した面が確認されており、今後削平による消失を免れた弥生時代以前の遺構が検出される可能性が高い。なお、今回の調査で検出した各時代の遺構分布状況を図示すると図23の通りとなる。

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構・遺物は4区でしか確認していないが、旧地形を考えると2区東半から4区までの範囲を北限として、南側に分布していたものと推定される。今回の調査では、弥生時代から飛鳥時代までの遺構はすべて上面が削平された状態で検出されており、弥生時代には堆積する土より流出する土のほうが多かったことが分かる。弥生時代後期の土坑SK578とピットSP604ではタタキ甕の底部が正位置に座った状態で検出されており、土器の大きさを考慮すると、弥生時代の地面は少なくとも30cmは削平されているものといえる。この他に弥生土器の脚部と考えられる破片が出土しているSX589などは、上層から須恵器の細片が出土しているが、これが混入であれば、弥生時代中期の遺構である可能性もある。

従来、岩橋高柳遺跡のある岩橋～和佐の平野部は弥生時代の遺跡がまったく知られていなかったが、今回の調査を通して周辺には弥生時代の遺跡が多数存在したものと推定される。但し、包含層の形成はみられず、遺構の埋土は地山とほぼまったく同色であるので、工事立会いなどで確認するのは至難の技といえよう。遺跡の把握をするためには、ある程度の面的な調査が必要と判断される。

(2) 古墳時代

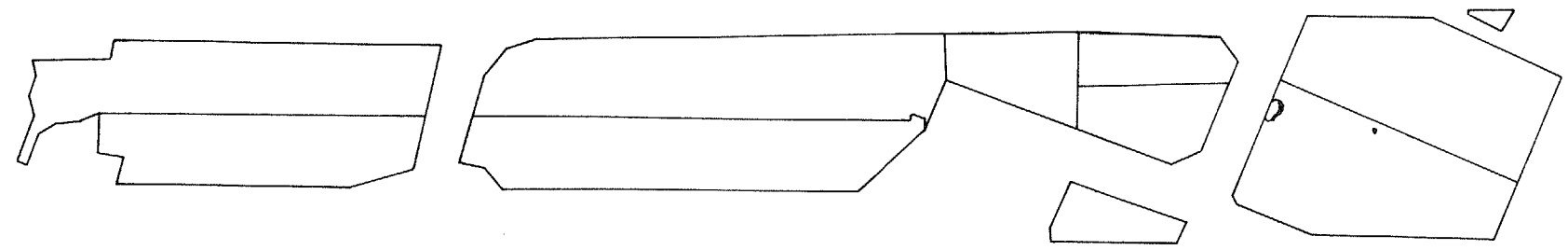
古墳時代については遺構を確認していないが、飛鳥時代の遺構に混じって、須恵器坏蓋と埴輪が1点ずつ出土している。周辺の古墳時代の遺跡から流入した遺物と考えられる。

(3) 飛鳥時代

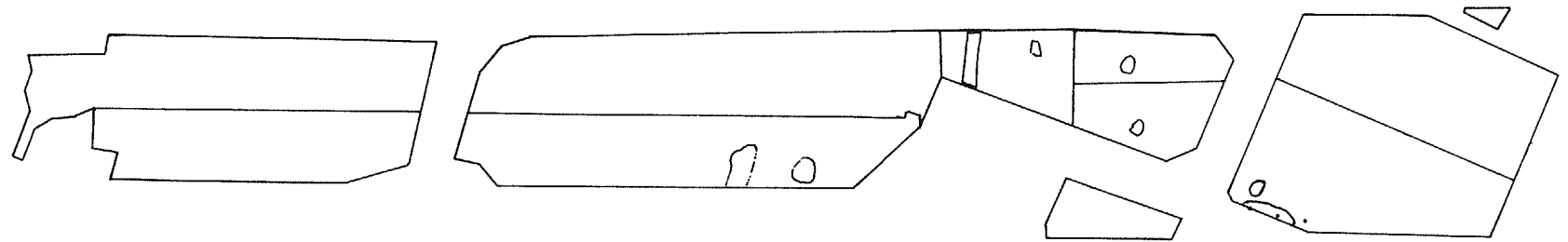
飛鳥時代の遺跡は、土坑が多数検出された。おそらく集落などの中心からは外れているのであろうが、2区東半～4区の南側で遺構の密度が高くなるものと推定される。飛鳥時代の包含層はほとんど見られず、浅い遺構は削平されているものと推定される。

古墳時代から飛鳥時代にかけて、古墳を築造する墓域は紀ノ川左岸河口部から花山・岩橋の丘陵へと移動しており、宮井用水に沿って生産域も拡大しているものと推定される。集落域についても、条件のよい岩橋Ⅱ遺跡や栗栖Ⅰ遺跡などではおそらく古墳時代から集落域であり、岩橋高柳のような水害の影響に悩まされる縁辺部にあたる地まで、開発が及んだのが飛鳥時代頃にあたるものと判断される。

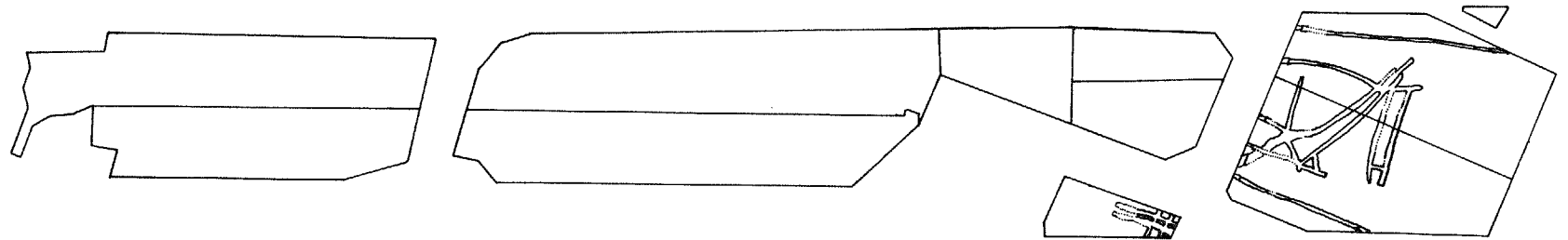
弥生時代



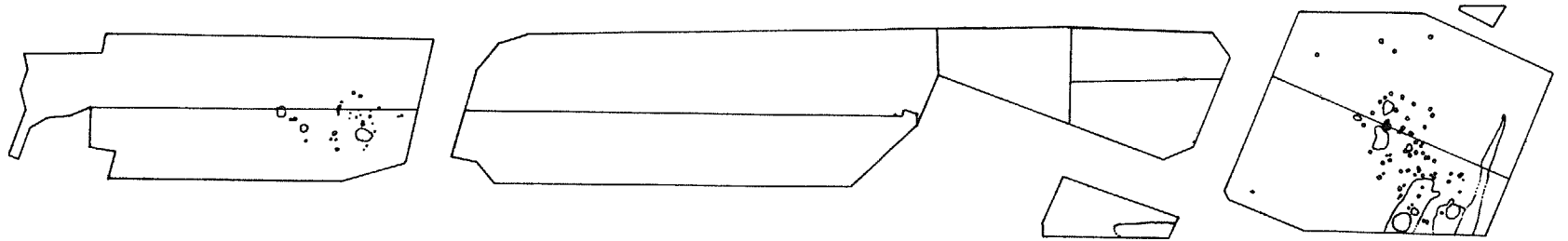
飛鳥時代



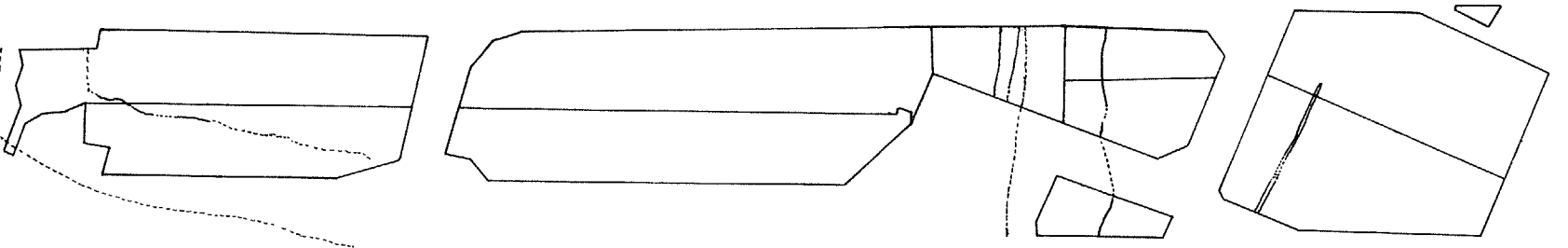
奈良・平安時代



鎌倉時代



室町時代



江戸時代

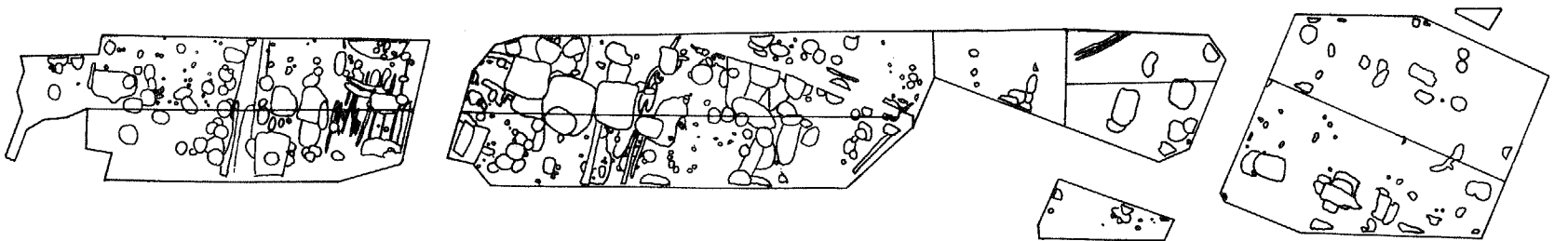


図23 遺構の変遷

(4) 奈良・平安時代

4・5区では飛鳥時代以降鎌倉時代以前の素掘小溝が不定方向に走っている。小溝からは須恵器甕・提瓶のほか、黒色土器や土師器皿が出土しており、奈良・平安時代頃に埋まったものとするのが妥当であろう。溝は微高地の最も高いところを中心に分布が濃く、突然途切れているような状態で検出されている。

(5) 鎌倉時代

鎌倉時代には4区に屋敷地が形成される。掘立柱建物跡は2棟確認しているが、その他の柱穴・ピットも多数存在する。柱穴からは13世紀代の後半を中心とする瓦器片が出土している。隣接地には井戸が作られており、井戸の上にはSX586とSX588が堆積している。出土遺物から考えられる13世紀後半から14世紀初頭までの建物の変遷は、「不明建物→SB01→SB02」、井戸等の変遷は「SE623→SX588・SE602→SX586」であり、区画溝と考えられる溝SD510はこの期間を通して存在しているものと考えられる。

1区についても、井戸状の遺構とピット群があり、屋敷地の一部である可能性が考えられる。

(6) 室町時代

室町時代の遺構は溝状の遺構しか検出していない。5区で検出した幅10.3m、深さ2.9mを越す大溝は、3区と1区の落込みと土層・遺物が共通するものであり、堀状の遺構と認識できる。西辺は1区西端の下層が青灰色に還元している幅約10mの地点、北辺は現在の水路の地点が想定される(図24)。この想定される堀の内部には「岩橋」の旧名を冠した湯橋家の主屋が位置しており、伝・岩橋城跡(=城屋敷・庄司屋^{註6})との密接な関係が考えられる。

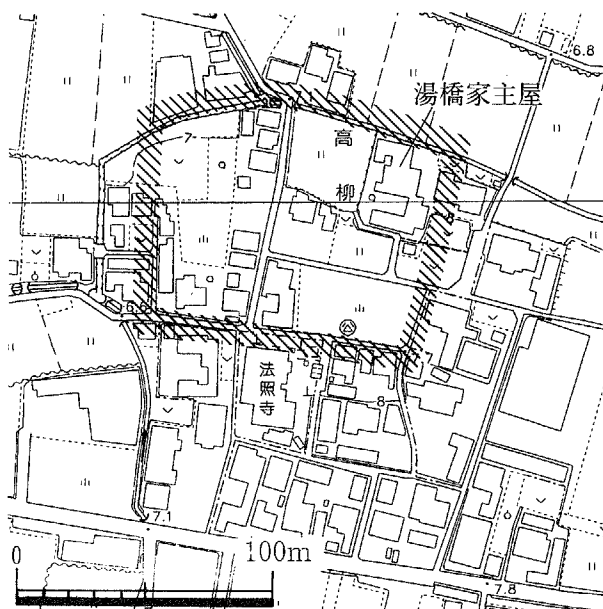


図24 堀の推定位置

(7) 江戸時代

江戸時代の遺構は調査区全域で検出された。室町時代の堀状遺構の内部に対応する範囲で、特に高密度の分布を示している。江戸時代前半については遺物が少量出土する程度であり、18世紀頃の遺構がほとんどである。紀州藩の大庄屋と田辺藩の納庄屋を務めていた湯橋家の動向と関係するものと考えられる。遺跡の東部においても、17~18世紀の遺物の出土する石組井戸603や18世紀~近現代までの遺物が出土する石組井戸608があり、周辺は高柳の集落の中心をなしていたものといえよう。18世紀後半から19世紀初頭頃の陶磁器焼成窯跡も2基確認されており、文献からは周辺は養蚕なども行われていたようである。^{註7}
^{註8}

第4章 総括

岩橋高柳遺跡では、弥生・飛鳥・奈良～平安・鎌倉・室町・江戸時代の、各年代の遺構が検出された。江戸時代の遺構のほか、大溝や土坑の埋土はやや暗い色調を呈し検出が容易であったが、弥生時代の遺構や小溝の埋土はわかりづらく、今後隣接地を調査する場合は細心の注意を払って精査する必要がある。

岩橋高柳遺跡の周辺は、和歌山市内における調査の空白地点にあたり、各時代の貴重な資料を提供できたと考える。遺構としては、岩橋・和佐周辺で初見の弥生時代の遺構や、江戸時代末の窯跡の存在を確認したことは意義がある。また、遺物としては、飛鳥時代の須恵器と土師器の一括資料や、紀ノ川下流域の終末期の瓦器編年に使える資料群など、研究面で重要な資料を確認しており、今回の調査は貴重な成果をあげたものといえるだろう。

註

- 1 水島大二・藤井保夫「第2章第1節40岩橋城跡」『和歌山県中世城館詳細分布調査報告書』和歌山県教育委員会1998.03
- 2 「埋蔵文化財包蔵地の範囲変更」『和歌山県埋蔵文化財調査年報－平成14年度－』和歌山県教育委員会2004.03
- 3 丹野拓「岩橋高柳遺跡の発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報2003』財団法人和歌山県文化財センター2004.05
- 4 「岡村遺跡調査概報」『海南市内遺跡発掘調査概報平成10年度』海南市教育委員会1999.03
- 5 川副麻理子「磁器の編年（色絵以外）4 仏飯器・水滴・人形・灯火具・緒締玉・戸車」『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会2000.02に戸車を転用した窯道具が例示される。
- 6 註1と同じ
- 7 笠原正夫「湯橋吉良太夫里通の訴状一件－ある地土の生活意識について」『和歌山市史編纂資料叢書』1965
- 8 中村貞史「近世窯業遺跡地名表・和歌山」『国立歴史民俗博物館研究報告73－近世窯業遺跡データ集成－』国立歴史民俗博物館1997.03に県内の窯跡がまとめられている。



1 遺跡遠景（北から）



2 遺跡遠景（南から）

1-1区
上面全景
(東から)



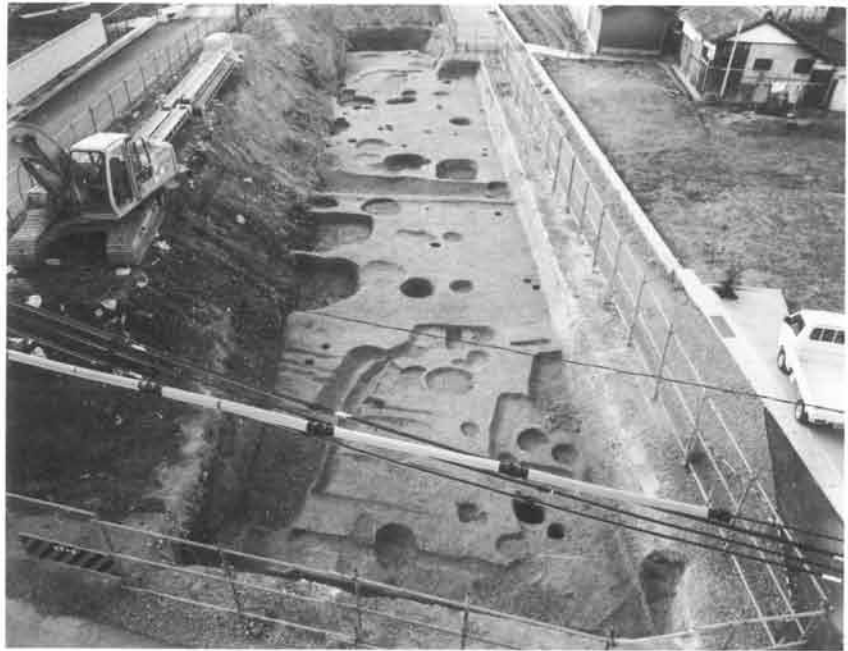
1-1区
下面全景
(東から)



1-1区
落込み
(西から)



1-2区
全景
(東から)



1-2区
西半部
(南東から)



1-2区
西端落込み
(南から)



2-1区
全景
(西から)



2-1区
SK72(左)・SK115(右)
(北から)



2-1区
窯跡 SX97・98
(南西から)



2-2区
全景
(西から)



2-2区
全景
(東から)



2-2区
西端部
(南東から)



3-1区
全景
(西から)



3-1区
土坑SK431
(北から)



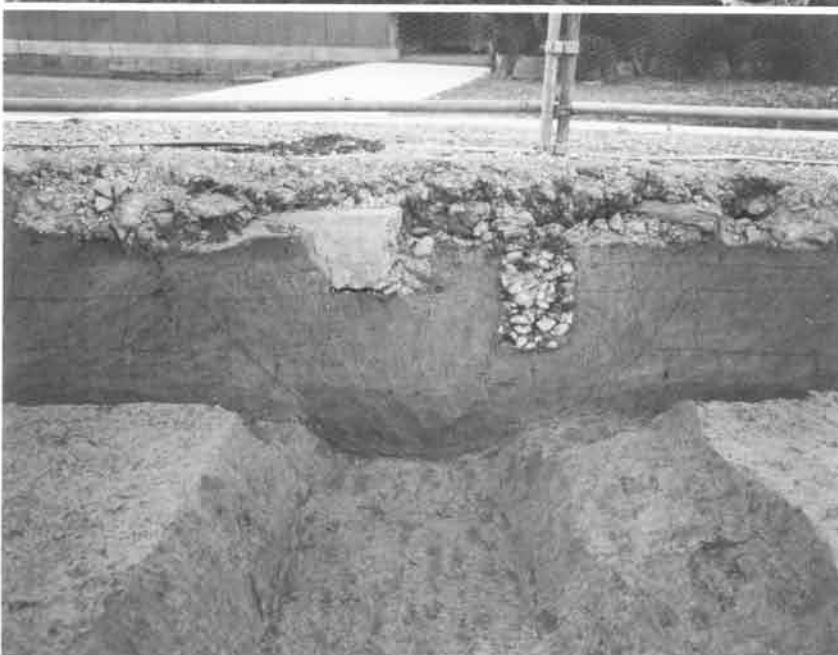
3-2区
全景
(西から)



3-3区
全景
(西から)



3-3区
溝SD100
(南から)



3-3区
溝SD101
(南から)



4-1区
遠景
(東から)



4-1区
全景
(東から)



4-1区
掘立柱建物跡SB01
(北から)



4-1区
SD509須恵器出土状況
(西から)



4-1区
石組井戸SE503
(南から)



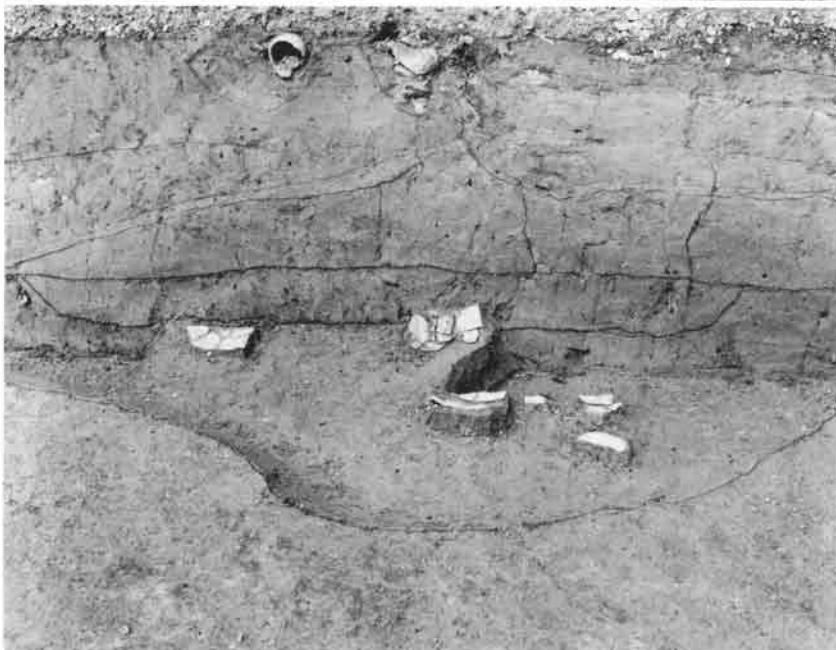
4-1区
石組井戸SE508
(南から)



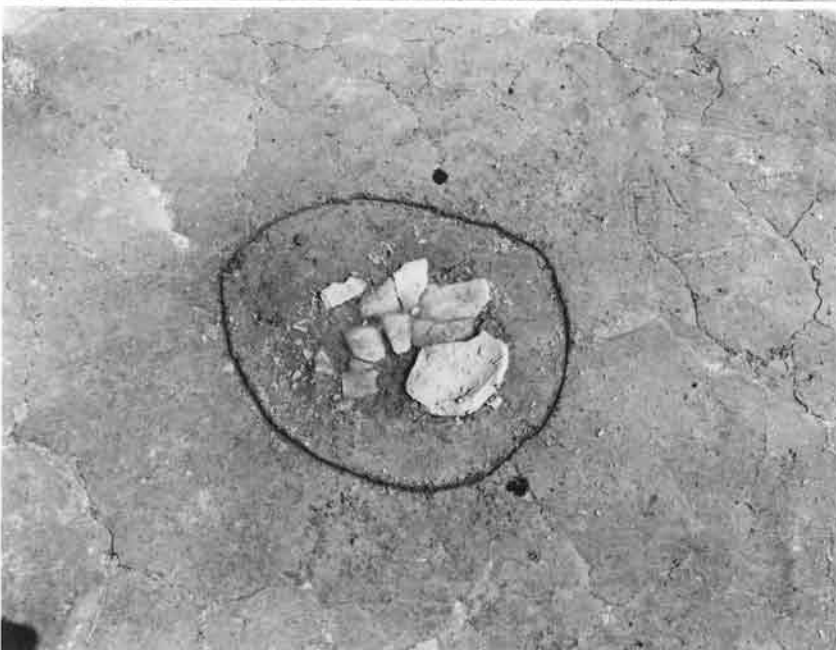
4-2区
全景
(東から)



4-2区
土坑SK578
(東から)



4-2区
ピットSP604
(南から)



4-2区
土坑575
(東から)



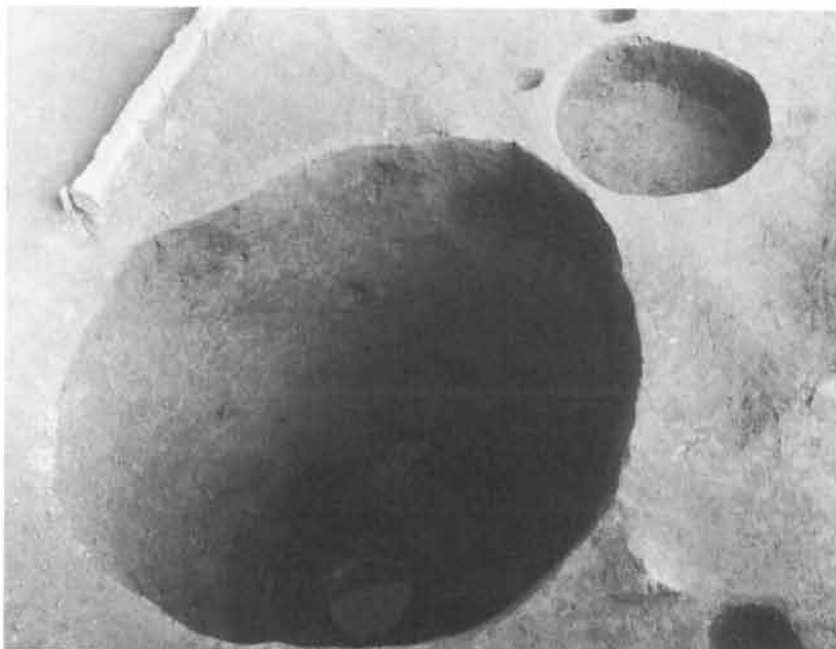
4-2区
遺構SX579
(北から)



4-2区
素掘り溝群
(北から)



4-2区
井戸SE603・
埋桶跡SK604（右奥）
（南から）



4-2区
井戸SE623
（南から）



4-2区
ピットSP624
（南から）



5区
全景
(西から)



5区
堀状遺構SX630
(北西から)



土層堆積状況
(4区中央部)
(北から)





1



4



2



5



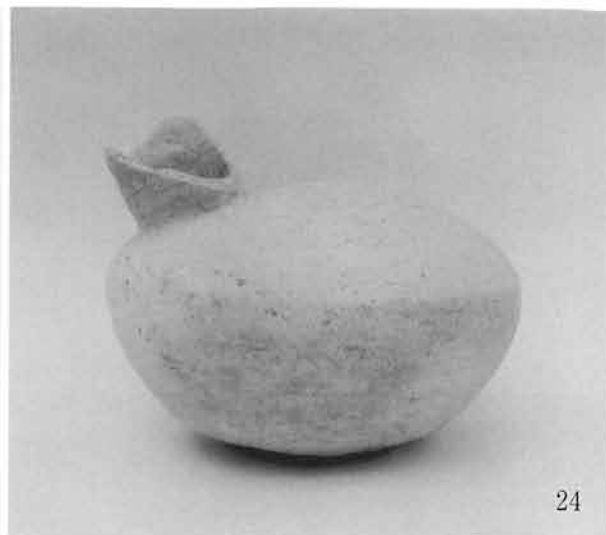
6

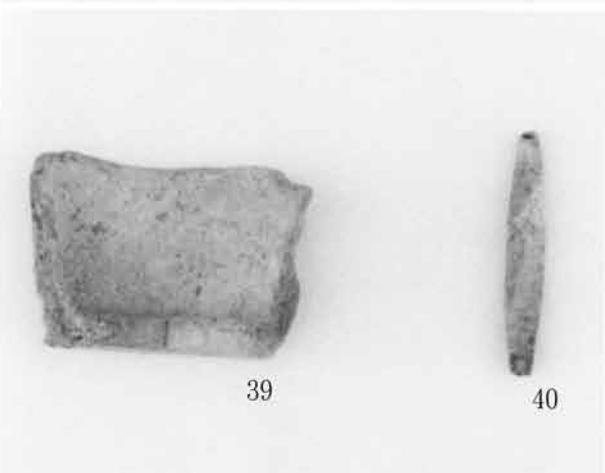
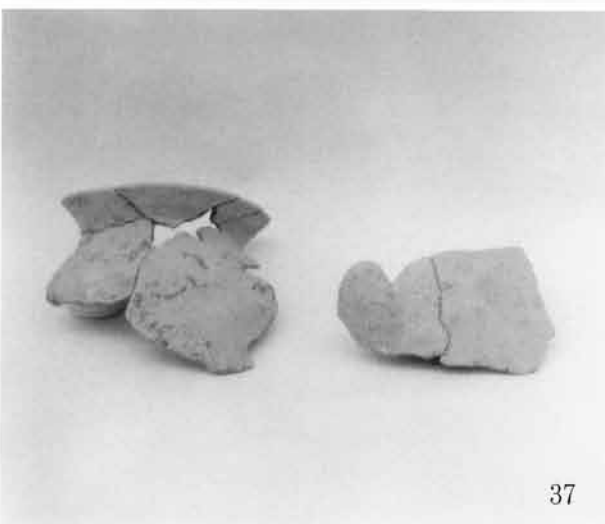


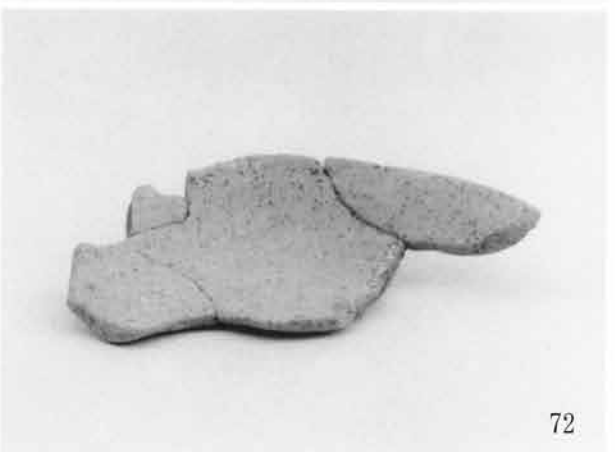
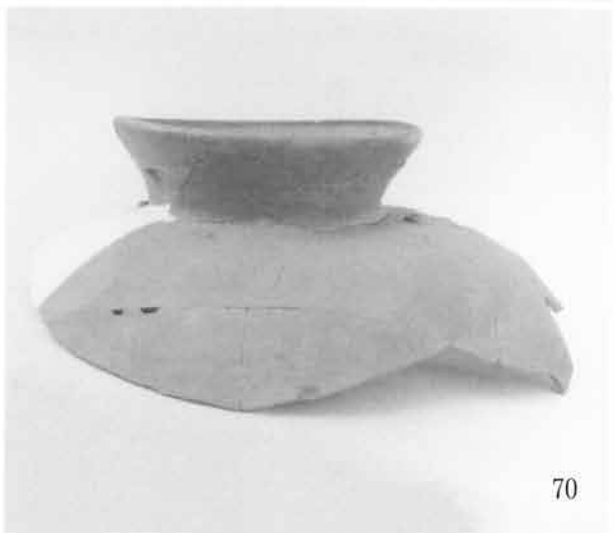
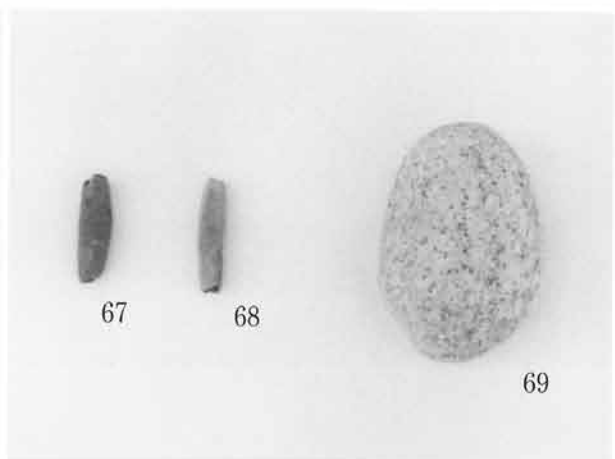
3

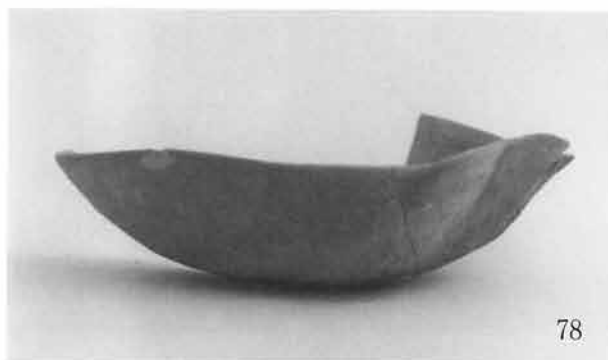


8









78



97



82



98



85



103



87



104



92



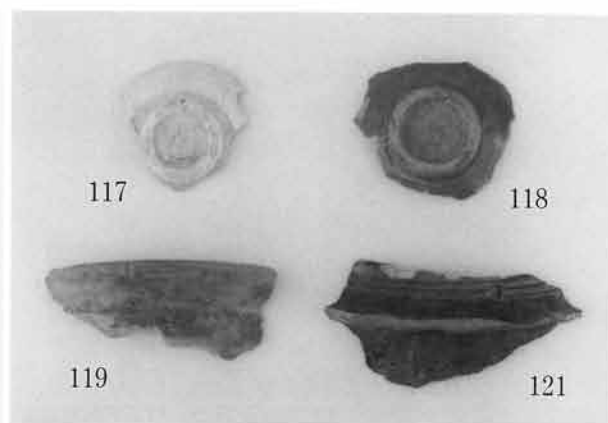
105

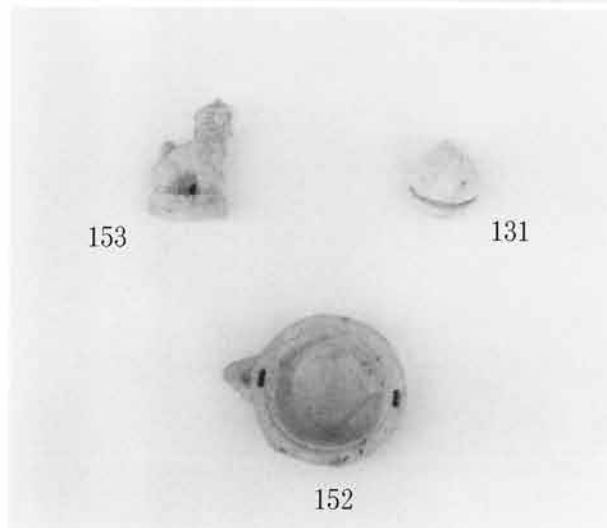


95



106





報告書抄録

ふりがな	いわせたかやなぎいせき							
書名	岩橋高柳遺跡							
副書名	井ノ口秋月線道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
編著者名	丹野拓							
編集機関	財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒640-8268 和歌山県和歌山市湊571-1 TEL 073-433-3843							
発行年月日	西暦 2004年6月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
いわせたかやなぎ 岩橋高柳 いせき 遺跡	わかやまし 和歌山市 いわせ 岩橋	3020150	427	34° 14′ 05″	135° 14′ 10″	2003年 11月4日 ～4月17日	2,561	県道井ノ口 秋月線道路 改良工事に 伴う発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
岩橋高柳 遺跡	集落・ 城館	弥生時代 飛鳥時代 奈良～ 平安時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代	土坑・ピット 土坑・溝・柱列 溝 掘立柱建物跡・井戸・ 溝・土師皿埋納遺構 堀状遺構・溝 窯・井戸・埋甕・溝・ 土坑		弥生土器、埴輪、須 恵器、土師器、黒色 土器、瓦器、青磁、 白磁、瓦質土器、中 国製青花、国産陶磁 器、瓦、土錘、窯道 具、土製品、石製品		伝・岩橋城跡のもの と考えられる室町時 代の堀状遺構と、江 戸時代末期の窯跡を 確認。	

岩橋高柳遺跡

— 井ノ口秋月線道路改良工事に伴う発掘調査 —

2004年6月30日

編集・発行 財団法人 和歌山県文化財センター

印刷・製本 有限会社 土屋総合印刷